

ハザマ「絶対に笑って
はいけないブレイブ
ルールですよ！ひゃっは
あああああ！！」

arutairu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

帝がある日こう言った：

「ガキ使が見たい」と…

そんなこんなで統制機構の方々はその企画をする事に…

そして無理やり連れてこられた哀れな五人。

次々と来る笑いの刺客に、耐えられるのか!?

目次

第一話	ツバキ「もう、お尻が大きくなっ ちやいそう……」	1
第二話	バング「こつちでござる w w こつちでござる w w」	12
第三話	ハザマ「ハザママン子といいま す」	26
第四話	ニルヴァーナ「アツアツアツ ♂」	40
第五話	「子供に大人気のプロレスラー アベラエルことアズラエル、また掘られ る!!」	55
第六話	バング「君はズバリ……緑膿 菌でござる!!!」	67
第七話	イグニス「クロバー」「うふ ふつよろしくね?」	79
第八話	本文：たすけテ ツれてかレタ	89
第九話	ラグナ「ハザマ緑膿菌の定理」	99
第十話	レイチエル「どうも☆」	112
第十一話	ツバキ「あ、アワビおいしい ……」	125
第十二話	マコト「悪意の塊だね! (迫 真)」	136

第十三話 レリウス「私は……お前に
ぶっかけたいっ!!」

150

第十四話 ラグナ「…ウソやん」

163

第十五話 ノエル「あ、ぶっかけ大佐だ」

173

第十六話 レイチエル「もがもごお…」

183

第十七話 ゴリバング「ウホホンw wウ

ホホンw w」

193

第十八話 ツバキ「あ、咎を追うんじやな
くてポリスメンに追いかけられるべき人

だ」

204

第一話 ツバキ「もう、お尻が大きくなっちゃいそう…」

〓朝7時00分 近くの公園〓

ラグナ「おいテルミイ……言いたい事は山ほどあるが一つだけにしてやる……なんで俺がこんなところに集められたんだ!?!あ?」

ハザマ「まあまあ、それも今から説明しますからあ」

ノエル「私もホントはまだ寝てる時間なのに急にこんなところに飛ばされて……」

ラグナ「お前もかノエル……つかお前まだ寝間着姿じゃねえか。」

ノエル「基本一日中これですけど?」

マコト「私も人のこと言えないけどさあ……流石にそれはヒクわくノエルン……」

ハザマ「おやナナヤ少尉、やっと来ましたか」

マコト「いや、私できれば来なくなかったですけど……ツバキがどうしても行きた
いって無理やり……」

ツバキ「私、一度でいいからこういうのやってみたかったです!!」

ラグナ「その様子じゃあ今から何するか知ってるみたいだな。じゃあとりあえz……」

ハザマ「そのことについては私から説明させていただきますよ」

ラグナ「てめえの説明い？できんのか？」

ハザマ「耳の穴かっぽじってよく聞いとくんだな。なんでこんな事になっちゃったか…」

ハザマ「そう…それは数日前の事だった…」

く数日前 帝のお部屋く

帝「ガキ使が見たい…」

ハザマ「は？」

帝「百年前には日本で『ガキの使い』というテレビ番組があったそうじゃ」

ハザマ「はあ…」

帝「それをわらわは今見たいのじゃ、早急に準備をするが良い」

ハザマ「また急な…」

??? 「残念ながら帝よ。それは無理でございます…」

ハザマ「あつ……あなたは……！」

ハザマ「変態仮面!!？」

レリウス「やかましいわ」

帝「……どういう事じゃ？できないとは」

レリウス「今月の統制機構の予算……赤字ギリギリでなんとかまかなっている状態です……なぜだかわかりますか？」

帝「いやさっぱり」

レリウス「帝、あなたの生活費が今の統制機構の出費の8割を占めているからです。その額軽く億越え……」

帝「……」

レリウス「衛士達の給料も今や300円ほど、一か月の間、遠足のおやつも買えるかどうかの金でどう生活しろと、苦情も多く来ております。」

帝「なんとかすれば……」

レリウス「無理です」

帝「そこをなんとk…」

レリウス「無理です」

帝「……」

レリウス「……」

帝「分かった。レリウス、もっと近う寄れ」

レリウス「?なんでございましょうか?」

帝「お主が今までイグニスに秘密で会ってきた女性の名前全部イグニスにメールで送るぞ?」
コソコソ

レリウス「もうすでにばれています。昨日も顔面にタメ無しボルテード喰らいました
…」
コソコソ

帝「じゃあ根も葉もない噂広めるぞ」
コソコソ

レリウス「じゃあつてなんですか……どんな噂です?」
コソコソ

帝「仕事場では金髪、ボイン、セクシーの三つしかしゃべらないっていう」

レリウス「帝の命は絶対、必ずや成功させてみせます…」

ハザマ「ちよつちよつとレリウス技術大佐!?何を吹き込まれたんです!？」

帝「そうときまれば明後日までにこの企画を完成させてくるのじゃー!!」

~~~~~

ハザマ「…と、いう訳だ」

ラグナ「ほんとに大丈夫なのか、統制機構…」

ノエル「私最近給料全然もらえなくて。毎日そうめんで耐えしのいでるんですよ

!!」

マコト「それはノエルンが全然仕事しないからだと思うな…」

ハザマ「はくいそつれじゃ今から……『絶対に笑ってはいけないブレイブルー』ポロ

りもあるよ!』開催だぜ! ひゃっはああああ!!」

ラグナ「いきなりかよ!」

プアアアアアン

ラグナ「てかおい、最後余計なの入ってんじやねえか…」

ノエル「ぷっww」

デデーン ノエルアウトー

ノエル「ww…え?」

スパーン

ノエル「痛っ!」

ハザマ「あ…説明する手間が省けたわ。まあみての通り笑ったらさつきみたいに統制機構の方にお尻をたたかれるからな、ひゃっはああああ!!」

ラグナ「お前その語尾…」

ハザマ「えー…という訳で…」カンペちらっ

ハザマ「今回は…このメンバーで…」カンペちらっ

ハザマ「やって…いきたいと…思い…」

マコト「めちやくちやカンペ見てるぞ」

ツバキ「んっふww」

デデーン ツバキアウトー

ツバキ「そういつた説明は不要よwwマコトww」

スパーン

ツバキ「うっ…く…」

ハザマ「ます…ひやつはあああああ!!」

デデーン ラグナ ノエル マコト ツバキアウトー

ラグナ「テルミwwだからその語尾ww」

スパーン

ハザマ「そして今回行くのは…子犬ちゃんよお、今のオレの服装から見て分かるか？」

「

ラグナ「え？あ…：…諜報部の服だから、統制機構の諜報部の仕事か？」

ハザマ「このドアホ!!違うわ!!どっからどうみても今回の仕事はレストランのウェイ

トレスだろうが!!」

デデーン ラグナ ツバキアウトー

ツバキ「そんな理不尽な…どう見ても違うww」

スパーン

ツバキ「つく…：…もう、お尻が大きくなっちゃいそう…」

マコト&ノエル「…」

ツバキ「もう、お尻が大きくなっちゃいそう…」

デデーン ノエル マコトアウトー

ノエル「なんで二回言ったww」

ラグナ「おまえら仲間の潰し合いはそんなぐらいにしとけよ？あと24時間近くあるんだからよ」

ツバキ「そ、そうね…ごめんなさい」

ノエル「う、ううん。大丈夫だよツバキ」

ハザマ「それじゃ一人ずつこの中で着替えてもらいましょうか ひやつはあああああ  
!!」

ラグナ「もうお前それで慣れたのね…」

ハザマ「まずはヴァーミリオン少尉からお願ひできますか？」

ノエル「はい！了解です!!」

〽十分後〽

ハザマ「できましたか〜?」

ノエル「ばっちりです!」

ハザマ「…それでは、お願いします!!ひゃっh…ゴホツゴホツ…」

デデーン 全員 アウトー

スパーン

ハザマ「あー…いてえ」

ラグナ「おい待て、なんでテルミも叩かれたんだ?お前進行役じゃねえのかよ?」

ハザマ「ご心配どうも。オレも今回は参加だよ。途中でほかの奴にバトンタツチすんだよ」

ラグナ「あー…やべえその引継ぎ役すごい不安…」

ハザマ「それはそうと、ヴァーミリオン少尉、お願いします」

パサッ

ノエル（フリル付きメイド服）「ど、どうですか？」

マコト「すっごい可愛いよ!!ノエルン!!」

ツバキ「ええそうね、フリルもいっぱい付いていて…似合ってるわよ」

ノエル「私、こうゆうの一回は来てみたかったんだよね♪」

ハザマ「それじゃ次は子犬ちゃんだな」

ラグナ「おお、着替えてくるわ」

ノエル「ねえねえ、ラグナさんどんな衣装かなあ？」

ツバキ「案外フォーマルな感じになるんじゃないかしら？」

マコト「私はちよつと危険な感じになると思うなう…」

ハザマ「それじゃ、子犬ちゃん…じゃなくてラグナ、お願いします!!」

ファサッ

デデーン 全員 アウトー



## 第二話 バング「こっちでござるwwこっちでござるww」

前回からの続き

デデーン 全員アウトー

ハザマ「こww、子犬ちゃんよおwwおま、その格好ww」

ラグナ（巨乳ウエイトレスコス）「うるせえ!!こっちだつて恥ずかしいんだよ!!」

ノエル「ラグナさんが巨乳ww」

ツバキ「や、やめなさいノエルww今私ツボつてるからww」

スパーン

マコト「あく…いったい…と…とい…かなに『これ』？」

ラグナ「これ扱いすんなよ…」

ハザマ「あのパンダ連れた巨乳女医者も顔負けのデカパイだな…それなに詰めてんだ

？」

ラグナ「いや、さつき女性ホルモン注入されてさ…」



デデン ハザマ アウトー

ハザマ 「んな訳ねえだろうが w w 普通に答えやがれ w w」

スパーン

ラグナ 「悪い悪い、今の内に回数稼いどころと思つてよ」

ツバキ 「いや、そういう趣旨じゃありませんから…」

ラグナ 「え？マジでか」

ツバキ 「気づいてなかったんですか」

マコト 「それはそうと…」

ラグナ 「ん？」 バイーン

マコト 「だ、だから…」 プルプル

ラグナ 「だから何だよ、言いたいことは言えよ」 ブルンタツタブルンタツタ

マコト 「だからその胸何を詰めてんのかなって…（よっしやああ!!なんとか耐え  
きつたよ天国の父ちゃん！母ちゃん！…あ、どっちも死んでないわ）」

┌

ラグナ「ん?…ああそんな事か。それは…」ズポツ

ラグナ(つるぺったん)「この超デカ肉まんが入っててよ」

デデーン ノエル マコト ツバキ ハザマアウト

ノエル「いきなり胸から出さないでくださいよww」

ハザマ「くそwwあの兵器想像以上に強力だぞww」

マコト「あゝもーwwさつきにはなんとか耐えたのにー!!」

ツバキ「こww…これは反則ですよwwラグナ||ザ||ブラッドエツジww」

スパーン

ツバキ「でも、この叩かれた時の態勢、ちよつと恥ずかしですね…」

ハザマ「おや、何ですか?」

ツバキ「こ、こう///お尻を突き出して///」

ノエル「立ちバツクの態勢だね!ツバキ☆」

デデーン 全員アウト

ラグナ「おいノエルwwてめえも自滅してんじやねえww」

ノエル「だってwwだってwwたつ…立ちバツkブツww」

ツバキ「く、悔しいww衛士ともあろうものがあんな卑猥な言葉でww」  
マコト「も〜ノエルン少し黙っててww」

スパーン

ラグナ「おい…まだ始まって二十分も経ってねえぞ」

ハザマ「こ、これはもうすでにマズイですねえ」

ツバキ「しばらくは笑い無しでいきませんか？」

マコト「そうだね！何回も立ちバツクの態勢は恥ずかしいもんね!!」

全員「……………」プルプル

マコト「…ちっ」

ハザマ「というか次はナナヤ少尉が着替える番ですよ」

マコト「え〜…あんなの次とか嫌な予感しか無いんですケド…」チラッ

ラグナ「お前そんな事言うとかこれで二段ジャンプするぞ？」

ハザマ「やめておこう、もうケツがもたねえよ…」

マコト「そうですね……………それじゃ、マコト||ナナヤ、イツキマ〜す!」

デーン ラグナ ハザマアウトー

ラグナ「おいwwわざとか!!わざとなのかww」

スパーン

十分後

ハザマ「えろ…それではナナヤ少尉、お願いしまーす！」

ファサツ

マコト「きゅっぴびびびーん!!まつこまつこりくん♪マコト||ナナヤちゃんなり  
よお？」

全員「(・ω・)」

マコト「なんか…ごめんなさい…」

ノエル「服は…ふつうのウエイトレスさんのだね……」

マコト「う、うん…普通でよかったよ…」

ノエル&マコト「……………」

ハザマ「さ、気まずい空気の中でツバキ中尉、着替えをお願いします!!」  
 ラグナ「この調子で行くとあいつも普通の服っぽいかな」  
 ノエル「そうだといいですけどね」

五分後

ハザマ「それでは、ツバキ中尉、お願いします!!」

ツバキ（アラクネタイツ）「……………」

ラグナ「あつあぶ…あぶねくく」プルプル

ノエル「顔がわからないけど多分ツバキだよねww」プルプル

ツバキ「きえひひいいいい!!あ 我喰う う!!きひ いいいい!!」

デデーン ラグナ ハザマ ノエル マコトアウトー

ラグナ「やwwめwwろww」

ハザマ「ツバキ中尉って実はこんなキャラだったっけかwwww?」  
マコト「私たちもこんなツバキ見るの初めてだよwwww」

スパーン

ツバキ「ごめんなさい…こんな感じかなと思って…」

ノエル「うん、あつてるけどやめてね」

ツバキ「了。我、理解た。」

ラグナ「…つく…く…」プルプル

ハザマ「それじゃ着替え終わったので魔操船発着所に行きましょうか、ひゃつはああああ!!」

ラグナ「お前さつきその語尾完全に忘れてただろ」

ノエル「プっww」

マコト「あ、ノエルン今…」

ノエル「え?笑ってないよ?」

マコト「でも今…」

ノエル「笑ってないよ？」

マコト「…」

ノエル「…」

マコト&ノエル「アハハ」

デデーン ノエル マコト アウトー

ラグナ「何やってんだ、二人とも」

ノエル「反省してます…」

スパーン

ハザマ「ここから発着所まで10分くらいですからそこまでは歩きますよ、ひやつはああああ!!」

ラグナ「ちっ…めんどくせえな」

↳魔操船発着所までの道↳

ノエル「でも、こうやって皆で行くのってなんだか遠足みたいで楽しいですねー」

ラグナ「はいはいそうだな、分かったからあつちの方向つといてくれ、今はそんな気分じゃねえんだ…」

ノエル「もく、硬いですねーラグナさんは、こういう時こそなじまない!!」

ラグナ「お前はなじみすぎだ、バカノエル」

ノエル「バカバカ言わないでください!!」

ラグナ「…しかし、なんで帝…いやサヤはなぜこんな事を？」ボインボイン

ラグナ「統制機構か？いや、もつと大きな何か大きな力が干渉しているのか？」ボインボイン

ラグナを除く全員「……」ブルブル

ラグナ「はっ…！まさかまたタカマガハラの干渉か!？」ブルルンブルルン

デデーン ハザマ ノエル マコト ツバキアウトー

ハザマ「こww子犬ちゃんwwその格好で冷静にならねえでくれww」

ノエル「頭かしげるたびに胸がすんごい揺れてるんですけどwwww」

マコト「ホント私よりでかいんじゃない？ww」

スパーン



## 8時00分 魔操船発着所

ラグナ「魔操船なんて乗ったことないからよく分からんが…揺れんのか？」

ツバキ「心配いりませんよ。最近の魔操船は低振動ですし、ましてや統制機構の魔操船は危険な兵器を積んでの運行もあり得ますから振動はほぼ0になっています」

ラグナ「そりゃ良かった」

ノエル「あれ？ラグナさんもしかして乗り物苦手なんですか？」

ラグナ「ああ、だから大抵移動は歩きだ」

ノエル「でもそれだと体鍛えられて良いんじゃないんですか？」

ラグナ「まー、そうかもな」

ハザマ「ん？何だかあつちの方が騒がしいですねえ？ひやつはああああ!!」

ノエル「あ、ホントですねそれになんか衛士の人たちも見えますし、事件かなんかじゃないですか？」

ラグナ「テルミ、お前なんか聞いてんじやねえのか？」

ハザマ「私はここにみなさんを連れてくるまでが仕事でしたからね、他の事は何も…」

ひゃっはああああ!!」

ツバキ「次の魔操船の到着は………後8分後です。まだ少し時間ありますし、すこし見に行きませんか？もし何かしらの事件ならば、私達も出動する事になるでしょうしね」

ラグナ「オレは衛士じゃ無いんだが？」

マコト「史上最高賞金額の大犯罪者が加勢してくれたら百人力ですわね!!」

ラグナ「はあ……めんどくせえ」

ツバキ（アラクネタイツ）「すみません、どうしたんですか？」

衛士A「ひっ……あつ統制機構の人ですか？」

ツバキ「はい、たまたまこの近くを通りかかった第零師団に所属する、ツバキIIヤロイ中尉であります、この近くで何やら人だかりができていたので、なにか事件か何かが起こったのかと思ひまして……」

衛士B「ええ、今、この近くで変質者が暴れていて、手が付けられない状態だったんです」

ツバキ「まあ、それは。その変質者の特徴とかはありますか？」

衛士A 「特徴ですか?…うーん、特徴の塊のような人だったんですが…」  
ツバキ 「ど、どんな人ですか…それ」

衛士達 「お〜い今そつちに変質者が向かったぞ!!」

衛士A 「あ、あいつです!!」

ハザマ 「あいつ?」

全裸バング 「こつちでござるwwこつちでござるww」ヒュンヒュン

衛士C 「くそつちよこまかと…!」

衛士D 「裏に回れ!!背後を取られるな!!」

デデーン全員 アウトー

ラグナ 「忍者ww何やってんだww」

ハザマ 「すげえww隠してねえよwwあれもろでチ○コさらしてるぜwwww」

ノエル 「ちよつwwあれ、良いんですか?ww」

ツバキ「ノ、ノエル、見ちやダメよ!!」

スパーン

8時07分 魔操船発着所

ラグナ「あく……くっそ、あの忍者にはやられたわ」

マコト「こっちでござるwwこっちでござるww」

ラグナ「ぶふっww」

デデーン ラグナアウトー

ラグナ「ちよっ、やめろお!!今沸点下がってんだからww」

スパーン

ハザマ「おいおい子犬ちゃん大丈夫かよ?今お前がぶつちぎりでケツぶつ叩かれてっぞ?ひやつはああああ!!」

ラグナ「くっ…:今から本気出す」

ハザマ「まあなんにせよ今から魔操船に乗りますが、何個か説明があります。ひやつはああああ!!」

ラグナ「ああ、なるべく手短にな」

ハザマ「ええ、まず一つは、魔操船の中でも絶対に笑ってはいけない、は変わりませ  
ん、ひやつはああああ!!」

ツバキ「まあ、そうでしょうね」

ハザマ「そして二つ目、目的地につくまでにいくつかの停留所に止まります、ひやつ  
はああああ!!」

ラグナ「いちいち休憩すんのか？まあ、構わねえよ」

ハザマ「それでは、魔操船に乗り込みましょうか！」

ハザマ「あ、やべ間違えた。乗り込みましょうか！ひやつはああああ!!」

デーン ラグナ ノエル マコト ツバキ アウトー

ラグナ「キャラ付けぐらい最初から決めとけww」

ノエル「今、完全に素が出ていましたよwww」

スパーン

つづく

## 第三話 ハザマ「ハザ＝マン子といます」

～8時20分 魔操船内部～

ラグナ「思ったより中はきれいなんだな…」ボインボイン

ハザマ「あ、そうそう席はあそこにある長椅子に私、子犬ちゃん、ヴァーミリオン少尉、ナナヤ少尉、ツバキ中尉の順でお願いしますよ」

ラグナ「?、もうひゃつはああああ!!、は言わねえのか?」ボイン

ハザマ「なんかもうのどがやられてきたからもういいや」

ラグナ「ああ……やっぱりかなりのどに来てたのか…」ボインボ

マコト「今気づいたけどさ、私達以外の人も結構これに乗ってるんだね」

ラグナ「そりゃ公営の魔操船なんだしオレ達以外の一般人も乗ってるのなんか当たり前だろ?」ボインボイン

マコト「そ、そうじゃなくて、さ…」

ラグナ「？」ブルルン

マコト「すごい面識のある人が乗ってたりしそうで…」

ラグナ「さすがに統制機構の奴らもそこまではしてこねえだろ。さっきの全裸忍者には驚いたが…：…考えてみる、月3000円の給料の施設だぞ？そんな大掛かりな事して来やしねえよ」ブルンタツタ

マコト「で、ですよねー」

ウイイイイイイイイ

ノエル「あ、動き出しましたよ!？」キヤツキヤツ

ラグナ「んな事あわかつてる…頼むから隣ではしやくのはやめてくれ…もう寒いといえこん中は暖房が効いてるから暑苦しいんだよ…あと近い」ブルン

ノエル「少しドキツとしちやいましたか？」

ラグナ「あ!?!…あー、そうだな…後10センチあればな」

ノエル「う…：…良いですよ！後2年もすれば10センチぐらいすぐでかくなっちゃいますから!!!」

ラグナ「そんなに待ってられるか。つーかお前もう成長期過ぎてるだろ?…なあ」  
ノエル「あ、発着所の様子が見えますよ!!」  
ラグナ「聞いちゃいねえし…」

ツバキ「そういえばさつきまであった人ばかりがきれいさっぱり無くなっていますね。」

マコト「もしかしてこの企画の為だけのエクストラだったりしてね☆」

ハザマ「ハハ…まさか」

ラグナ「ん?でも衛士達はいっぱい集まってるぞ?」ブルンプ  
ツバキ「あら、ホントですね。もう帰る準備でもしてるんぞ…」

全裸バング(手錠装備)「……」

衛士F「おい!さっさと歩け!!」

デデーン全員 アウトー

ラグナ「つかまつてるww」



スパーン

ハザマ「あいつ罪どんぐらいなんだろうな…」

ツバキ「おそらく公然わいせつ罪、そして騒いだ事による公務執行妨害、これの場合  
は…」

ノエル「ごめんツバキ頭痛くなってきたからもういいよ…」

ハザマ「…ふ」

デデーン ハザマ アウトー

ハザマ「んなっ!!今のは笑ってねえぞ!!?」

スパーン

ハザマ「くっそ…今の裁定絶対おかしいだろ…」

ピンポンパンポーン

アナウンス「間もなく第二発着所に着きます。お降りの方は、お忘れ物の無いよう…」

ラグナ「あ、もうそんなに時間経ったのか…後何個発着所行くんだ？」ボインボイン  
ハザマ「これを除いたら…後一つですわね」

ツバキ「この時間帯はよく衛士の方達もよく利用してるんですよ？」

ノエル「私もこの魔操船使って毎日勤務してるんです！」

ラグナ「お前そんな金あんのか？」

ノエル「え？払ってませんよ？」

ラグナ&ツバキ「は？」

ノエル「あ、だれかに私が乗ってるときの写真撮られたんですけど、見ます？」

ツバキ「ええ、是非」

ノエル「これなんだけど」

【ノエルが必至に魔操船の外壁にへばりついている写真】

デデーン ラグナ ツバキ アウトー

ラグナ「危ないからやめなさいww」

ツバキ「ノ、ノエルwwお金なら私が少しなら払ってあげるからwwww」

ノエル「え!?!ホントに!?!」

ラグナ「落ちたりしたらどうすんだよ…」

ノエル「……」

ラグナ「分かったか？だからこんな事…」

ノエル「……………た」

ラグナ「あ？」

ノエル「そこまで全然考えてもなかった…まさか落ちる事を想定なんて…」

ラグナ「お前ホントにバカノエルって呼んでいいか？」

ノエル「な、何でですか!？」

ハザマ「お前ら仲良いな…」

アナウンス「ドアが開きます。はさまれないようご注意ください」

ウィーン

???「ガツデム!!!」

全員「!?!」

衛士達「落ち着いて！そこから動かないでください!!」

カグラムツキ「この魔操船に乗ってる奴ら!!今からその場を動くな!!」

ハザマ「な、何なんですか!? 急に…」

ラグナ「統制機構の奴らもいっぱい乗り込んできたぞ!」

カグラ「今ここに超高額の賞金首が紛れ込んでいるらしい!!」

ラグナ「!? (くっ…まさかオレの事か!? 今ここは密室、逃げる事は不可能…: 終わってたか?)」

ノエル「あ、あの! ちなみにその人どんな事したんですか?」

カグラ「ん? あー、罪は殺人、死体遺棄、強盗、公然わいせつ、公務執行妨害、強姦、偽証、その他もろもろだな」

ハザマ「そ、そんな事までしてたのかよ子犬ちゃん…流石にオレも擁護できねえわそれ」

ラグナ「ち、ちげえよ! 確かに統制機構の奴らは何人かぶつ飛ばした記憶はあるがよお、オレは窯の破壊ぐらいいしかしてねえぞ!」

ツバキ「ちなみにその極悪犯の顔写真とかはあるんですか?」

カグラ「ん? ああすまないな。そういや提示してなかった…: …えーと、これだな」ピ  
ラッ

【鼻をほじっているハザマ(テルミ)の顔写真】

ハザマ「(; 皿) !？」

デデン ラグナ ノエル マコト ツバキ アウトー

ラグナ「こ、これはまたww無様な姿をカメラに収められたなあwwww」  
ツバキ「というかwwいかにも全然殺人とかできなさそうなwwww」

スパーン

カグラ「そして今から一人ずつお前たちの名前を聞いていく!!」

ツバキ「え?なんでですか?」

カグラ「情報によると、その犯人はイニシャルがT・Uらしいからな」

ラグナ「いやもうそんな事しなくてもオレの隣のこいつつかまえば良いじゃん」

カグラ「それじゃ端にいる変なタイツきたあんたからいくぞ」

ラグナ「無視かい」

ツバキ（アラクネタイツ）「え、あ、はい。ツバキyyoyイ中尉、であります…」

カグラ「イニシャルはY・T…顔も…違うな…こんなに犯人は幸薄そうな顔はして  
ねえ」

ツバキ「さ、幸薄い!？」

カグラ 「さて次、そのあんた、名前は？」

マコト 「マコトIIナナヤです」

カグラ 「N・M…こいつも違うか」

ノエル 「ラ、ラグナさん…イニシャルって何ですか？」

ラグナ 「適当にT・Uって答えとけ」

ノエル 「そしたらつかまるじゃないですか!!」

カグラ 「あんたは…：うん、違うな次」

ノエル 「え?…：なんか扱いひどくないですか？」

カグラ 「おいその赤いコート着てるの。名前は？」

ラグナ 「えー…：ラグナIIザIIブラッドエツz…」

カグラ 「うん違う、次」

ラグナ 「だんだん雑になってきてる…」

カグラ 「おい、そのあんた、名前は？」

ハザマ「えー…私諜報部のハザマと申します」

カグラ「ちげえよ、コードネームじゃなくて本名を聞いてんだよ」

ハザマ「え？私の本名はハザマですよ？」

カグラ「ハハハ、面白えな、オレは本名を聞いてるんだ」

ハザマ「え？あ、ああええと……」

ハザマ「ハザマン子と言います」

デデーン ラグナ ノエル マコト ツバキアウトー

ラグナ「おいテルミww往生際悪いぞww」

ノエル「ハザマン子ってww下ネタですか？ww」

ツバキ「最低ですね。ハザマン子ww」

スパーン

ラグナ「カグラさん、こいつの名前ユウキテルミです」

ハザマ「あつ、てめえ何言つて…」

カグラ「ユウキテルミ？イニシャルはT・Uだな。それに顔写真もそっくりじゃね

えか!!」

ハザマ「いや、人違いです」

カグラ「お前自分が何したか分かってんのか!？」

ハザマ「い、いや自分とんだ濡れ衣…」

カグラ「ちよつと来い、性根叩き直してやる!!!」

ハザマ「あ、あの？何をなさるつもりですか？」

カグラ「お前のその腐った性根を叩き直すんだよ」

ハザマ「あゝいや私、暴力は反対で…」

カグラ「そうか……じゃあ代わりにお前の名前を……大声で！フルネームで！聞かせてくれねえか？」

ハザマ「あ？それだけでいいんですか？……それじゃ」

ハザマ「ユウキ……テルミです!!」

カグラ「どおとおおりやああああ!!!」

バツチイイイイン

ハザマ「うばひいつ!!」



ラグナ「うっわあ…今のめちやくちや痛いやつじゃねえか？」

ドサツ

ノエル「あ、倒れ伏した」

ツバキ「あの、ハザマ大尉？大丈夫ですか？」

ハザマ「大丈夫じゃないです……」

カグラ「よし、それじゃこいつを拘束して本部に……」

ピリリリリリ　ピリリリリリ

カグラ「なんだ？こんな時に……どうした？………何い!? 犯人がそつちで見つかって今こつちに向かつてるだど!？」

衛士G「た、隊長!! 来ました! あいつです!!」

ラグナ「誰だ? テルミに似たやつなのか？」

ハザマ「もう何が起きても動じねえよ……」

ツバキ「あ、ビンタされたところ大丈夫ですか？」

ハザマ「まだヒリヒリします……」

衛士H「来ました!!あいつです!!!」

全裸バング「こっちでござるwwこっちでござるww」

デデン 全員 アウトー

マコト「もうこいつはいいよwwww」

ラグナ「おい忍者さつきつかまってただろwwww」

ノエル「しかも相変わらず全裸ww」

全裸バング「こっちでござるwwこっちでござるううううううww」パリーン  
ラグナ「変態忍者が窓突き破って外に出た!?!」

カグラ「くそっお前ら!!続け!!やつを逃がすな!!」パリーン  
ツバキ「ちよっかグラさん!...ここ今空中ですよ!?!」

しーしーん

ラグナ「だ、大丈夫か…あいつら」  
ハザマ「ま、まあなんとかなるんじゃないか？」

つづく

## 第四話 ニルヴァーナ「アツ♂アツ♂」

前回からのつづき

ラグナ「あ、おい。次の魔操船発着所が見えてきたぞ」

ハザマ「お？ああ、じゃあこの次が目的地だな」

ツバキ「ふう、乗ってた時間は多分二十分ぐらいなんだろうけど……なんかどつと疲れたわ……」

マコト「まあ、さっきの変態忍者には驚いたよね……さっきまで魔操船の外にいたのに。どうやって入ったんだろうね」

ハザマ「……………」

ラグナ「おいどうした？テルミ。さつきから口数少ねえじゃねえか。腹でも下したか？」

ハザマ「てめえと一緒にすんじゃねえよ。こちとら別の事考えてたんだよ……」

ハザマ（まさかさっきのは…フアントムか？……いや流石にあの帝もそこまで大掛かりな事は………ん？いや待てよ？そういえばちよつと前に………）

ちよつと前の日 帝の部屋 トイレ前

ジャアアアアアア      ガチャツ

帝「ふう、今日も快調じゃ」

ハザマ「あれ？帝？さっきまでベッドにいませんでしたか？」

帝「うん？メンドクサイからフアントムにトイレまで転送してもらったぞ」

ハザマ「そんな事にフアントム使わないでくださいよ……」

帝「よいではないか、減るものではあるまいし……おいフアントム、このゴミをゴミ箱に転送するがよい」

フアントム「……」

フォン

帝「ふむ、やはりどこぞの緑膿菌より役に立つわ」

ハザマ「誰が緑膿菌ですか!!!」

—回想終了

ハザマ（帝ならやりかねねええええ!!）

ツバキ「あら、ねえノエル、あれ」

ノエル「ん？何？」

ツバキ「ほら、そこの二人席のところ…」

カルル「クローバー…」

ノエル「え!?!カルル君!?!」ガタツ

カルル「あ」

ツバキ「こつちに気づいたみたいね」

カルル「これはまた、ツバキ先輩、マコト先輩、ノエル先輩、それと……お二方は先輩たちのお知り合いということではないですか？」

「  
ハザマ「かまいませんよ」

ラグナ「まあ、そんなもんか」

ツバキ「そういえばカルル君、今日はどうしてこんなところに？」

カルル「いや、次の魔操船発着所で有名なプロレスラーのミニライブのようなものがあるらしいので、是非見てみたいと思ひまして……」

マコト「あれ？カルルきゅん、プロレスなんかに興味なんかあったっけ？」

カルル「いや、僕は全くですけど……姉が……ね」

ニルヴァーナ「：／／／」

デデーン　ラグナ　アウトー

ラグナ「こいつがプロレスすんのかwww」

ハザマ「頬を染めんじゃねえwww」

スパーン

カルル「あ、着いたみたいですので僕はこれで……」

ツバキ「ええ、またいつか、ね」

ノエル「ねえ、さっき言ってたプロレスラーのミニライブってどんななの？」

カルル「あ、興味ありますか？魔操船発着所でやりますからその窓から見れますよ？」

ノエル「ホント!?楽しみだなー、どれどれ……」

プロレスラーアベラエル(アズラエル)「よい子のみんな!!今日は来てくれてありがとう  
おとおお!!!」

ガキ共「おとおおおおおwww」

デデン 全員 アウトー

ラグナ「あいつwwwよくこんなのをwww」

ハザマ「覆面かぶってるけどあれ、どうみても第七機関の狂犬ですよねwww」



スパーン

アベラエル（アズラエル）「よーしそれじゃあ今日も、いつものやつ、いつてみよー」  
ガキ共「わああああああ w w w w」

マコト「何やるんだろうね？」

ラグナ「どこぞの赤タオル野郎みたいに『1、2、3、ダー！』みたいなやつじゃねえのか？」

アベラエル（アズラエル）「アッー♂アッー♂」

ガキ共「アッー♂ w w アッー♂ w w」

デデーン 全員 アウトー

ラグナ「くっそ w w あいつ子供になに教えてんだ w w w」

ノエル「もう今度からあの人の名前アベラエルでもいい気がしてきた w w」  
ツバキ「子供に悪影響です w w w」

スパーン

ラグナ「よく見たらさっきの紫メガネもやってやがるし…」

ハザマ「…」プルプル

ラグナ「ん？どうしたよテルミ」

ハザマ「…あ、あれ…」プルプル

ラグナ「あれ？」

ニルヴァーナ「アッー♂アッー♂」

デデーン 全員 アウトー

ラグナ「なんだこの連続コンボwwww」

ノエル「色々言いたい事はあるけどwwww」

ハザマ「しゃべったwww」

スパーン

ノエル「もうあつちの方は見ないようにしときましよう…」

マコト「そうだね…耐えられる気がしないよ」

??? 「おうおうおう!! いけまへんがなああんちやん!!」

??? 「そつちこそあんまし調子のつたらあかへんでえ!!!」

ラグナ 「ん? 今度なんかあつちの席の方が騒がしいn…」

バレット 「ああん!? やんのか? あ?」

アマネ 「上等じやいわれえ!!」

デデーン 全員 アウトー

ノエル 「キャラwwキャラがww」

マコト 「ぶつ壊れてるってレベルじゃないよww」

スパーン

アマネ 「おうおうバレットさんよお!! あんましこつちを怒らせへんほうが身の為や  
でえ?」

バレット「それはこっちのセリフや!!」

アベラエル（アズラエル）『アッー♂アッー♂』

ガキ共『アッー♂wwアッー♂ww』

ラグナ「まだやってるぞ…あっち」

ハザマ「いい加減どっか行つてほしいぞ…」

ノエル「あはは、いつまでやるんですかね」

デデーン ノエル アウトー

ノエル「あ、やば。忘れてた…」

スパーン

バレット「もう罅があきまへんわ!!」

アマネ「それはこっちも思つとつたわ!!!」

ラグナ「なあ、この茶番見なきやいけないのか?」

ハザマ「さあ…魔操船も出発しませんし…見るしかないんじゃないのか?」

バレット「おうおうおう!!耳から手突つ込んで奥歯ガタガタ言わしたるか!?!」

アマネ「ふざけるでねえ!!オレがスーパーマンになったらバレットなんか秒殺やでえ

！」

バレット「もう…こうなったら…」

バレット&アマネ「変身や!!!」ドドンッ

ラグナ「いや、その理屈はおかしい」

デデーン ツバキ アウトー

ツバキ「まwww真面目につっこまないでくださいよwww」

バレット&アマネ「いくぞ!!変身や!!!」ドンッ

マコト「あ、カバン出した」

アマネ「…つしよ…ん…と」モソモソ

バレット「えつと…ここがこうで…」モソモソ

マコト「うわっ…手際悪っ!」

三分後

アマネ&バレット「よっしやああ!!ほないくでえ!!」

アマネ「あ、上下逆だった」

デデーン 全員 アウトー

ラグナ「時間の無駄だwww」

ツバキ「早く進めて……ww」

スパーン

バレット「おいどうしたよお!!早よ来んかい!」

アマネ「ちよつと待つとけやあ!!」モタモタ

二分後

アマネ「……よし!!」

バレット「いいか?ほなくてええ!」

アマネ「おうおう!!バレットさんよお!!」

バレット「なんやねんなあ!!」

アマネ「あのすみません…チャック閉めてもらっていいですか?」

バレット「あ、はい……これでいいですか?」

デデン 全員 アウトー

ハザマ「急にキャラを戻すなwww」

マコト「しかもアマネさん社会の窓閉めてもらってるしwww」

ラグナ「プライドねえのかwww」

スパーン

アマネ&バレット「……」スタスタ

ラグナ「帰るときは無言なのな……」

ウイイイイイイイン

マコト「あ、やつと動き出したよ……」

ツバキ「ホントこの発着所もかなりインパクトが強かったわね……」

ノエル「あ、ツバキ、マコト、下見ってみてよ下！」

ツバキ&マコト「下？」

アベラエル（アズラエル）&バレット&アマネ「アッー♂アッー♂」

デデン マコト ツバキ アウトー

ツバキ「くっ…ww油断したわww」

マコト「ノエルン…wwこの企画終わったら一発、殴らしてもらうかねwwww

」

スパーン

ラグナ「そーいや忘れてたけどさ、オレ達レストランのウェイトレスだろ？どこのかとかは分かっているのか？」

ハザマ「いや、まあでも聞いた話によると次の発着所でもうすでに案内役の奴が待機してららしいぜ？」

ラグナ「そうか…ならまあ安心だな」

ツバキ「あれ？そーいやラグナ||ザ||ブラッドエッジ、さつきと比べてなんか胸が小さくなったような気がするのですが」



マコト「…というか、なんか菌型みたいなものがあるんですけど…」プルプル  
ラグナ「我慢できへんかった…」

デデン ツバキ マコト アウトー

ツバキ「朝ごはん食べてきてないんですかwww」

マコト「しかももうもはや片方の乳無いしwww」

スパーン

ラグナ「もうメンドクサイからこれ食っちまおう」ズポツ

ハザマ「あ、貧乳になった」

ツバキ「もうこれでいいですよ…むしろ今までがおかしかったんですよ…」

ラグナ「あー、肩が凝ったわ…」

ノエル「一度で言ってみたいなあ…そんなセリフ…」

ハザマ「ちよつと、ヴァーミリオン少尉？目からハイライトが消えてますよ？」

つ  
づ  
く

第五話 「子供に大人気のプロレスラーアベラエルこと  
アズラエル、また掘られる!!」

前回からのつづき

ピンポンパンポーン

アナウンス 「えー、間もなく第三魔操船発着所に到着します。お降りの方はお忘れ物の無いよう…」

ノエル 「ワー、ラグナサン、ハツチャクジヨニツイタミタイデスヨ？」

ラグナ 「アア、ソウダナ。ジャアソロソロオリヨウカ？」

ハザマ 「横の二人が疲労とケツを叩かれすぎた事で壊れてしまった……」

マコト 「し、しっかりとしてノエルン!!今度一緒にマロンパフェ食べるって言ったで

しよ!? もちろんノエルンのおごりで!

ハザマ「おい子犬ちゃん! てめえもすっかりしやがれ!! お前もオレに土下座して靴なめます! ……つて言っただろ!!」

ラグナ「はっ…! オレは一体……」

ノエル「うゝん……」

マコト「…良かった、さっきまで二人とも訳のわからないうわごとを言い続けててすつごく怖かったんだから!!」

ツバキ「いえマコト、ノエルが訳のわからないうわごとを言ってるのは普段通りよ」  
マコト「あ、言われてみれば確かに」

ノエル「いやいや二人とも! 私そんなにアブナイ感じの人じゃないからね!」

ラグナ「それとテルミ、オレそんなこと言った覚えはないからな」

ハザマ「あらら…覚えてましたか……」

ラグナ「…へつくし!…:あーやっぱりもう冬だな…寒みいい…」

ハザマ「打ち合わせの時の話では8時30分にここで落ち合う予定だったんですけどねえ…」

ノエル「ホントにここで合ってるんですかあ?」

マコト「ちよつと、怖いこと言わないでよノエルン」

ノエル「えー、いやだつて、さっきの魔操船発着所にいた人がいるんだもん…」

マコト「え?」クルツ

スーパーマンの服を着たアマネ&バレット「……」

#### デーン 全員アウトー

マコト「これは確かに不安になるwww」

ツバキ「しかも二人ともしっかりスーパーマン装備www」

ハザマ「帝、ファントム乱用し過ぎだろおおwww!!」

#### スパーン

ラグナ「で、本当にここで合ってるのか?ああ?テルミイ…」

ハザマ「そんなに凄まじくても…私はなんとm…」

??? 「いや、ごめんなさ〜い！遅れちゃったわ〜!!」

ラグナ「あ？」

ライチ「フエイリン」あらあら、待たせちゃったみたいね？ごめんなさい、ラオチュウが急にどこか行っちゃって…」

ラグナ「え？もしかしなくてもあんたが今後の進行役？」

ライチ「ええそうよ？今後ともよろしくね？」

ラグナ「お、おうこつちもよろしくな？（あ、何だてつきりクソ弟（ジン）とかが来るのかと思ってたが案外まともじゃねえか…）」

ノエル「えと、ライチさん？ここから目的地まで、どのぐらいかかりますか？」

ライチ「うーん…そうねえ…ここからだ…ぎつと10分ぐらいってところかしら？」

ハザマ「という事は、また徒歩ですか？」

ライチ「そうねえ…そういう事になるかしら。まあでもあなたたちはまだ若いんだか

ら！このぐらいなんともないでしょ！」

ラグナ「全然平気じゃねえよ……ハア……道中何もなければ良いが……」

道中　　どこかの階層都市下層の町

ラグナ「へえ……下層の方はもつと廃れてると思っただが、案外活気があるんだな」  
ハザマ「まあ、この階層都市の首相のアへ総理のアへノミクス効果が色濃く出ているからなあ」

デデー　　ラグナ　　アウトー

ハザマ「あ？どうしたよ子犬ちゃん？今のどこに笑う要素があった？」

ラグナ「う、うるせえよwww」

スパーン

マコト「ん？……ねえみんな！あの看板見てみてよ！」

ラグナ「あ？看板？どこの」

マコト「ほら、あの掲示板みたいなのところの!!」

ツバキ「あらホント、結構デカデカとあったわね。どれどれ…」

【子供に大人気のプロレスラーアベラエルことアズラエル、また掘られる!!】

【紅潮したアズラエルの顔写真】

ツバキ「へ、へええ…」プルプル

ハザマ「なかなか大変なんですね…プロレスラーつてのも」プルプル

マコト「今まで何回ぐらい掘られてるんだらうね？」

デデン ラグナ ノエル ツバキアウト

ラグナ「そういうツツコミ、マジでいらねえからww」

ノエル「どうかこのアズラエルさんの顔、すごい…気持ちよさそう…ww」

スパーン



ハザマ「おいおい二人とも、都合上書かれてないところも含めて今ダントツで二位二位を争ってる状態だぜ？」

ツバキ「ノエルはまあいいとして、ラグナ∥ザ∥ブラッドエッジって笑いには弱かったのね。知らなかったわ」

ラグナ「ぐ……別に弱い訳じゃねえよ……ただ……こういうのに慣れてねえだけだ！」  
ハザマ「はいはい、じゃあ今後時間を重ねるたびにケツ叩かれる回数は減ってくんだな？」

ラグナ「そういう事だ」

ラグナ「なあ、ライチ……だっけか？まだ歩くのか？」

ライチ「ええ、でも後2〜3分つてところね」

ノエル「ねえねえライチさん！ライチさんももしかしてそこで一緒に働いたりしちゃったりするんですか!？」

ライチ「ふふっ……働くも何も、私はその従業員なんだから」

ツバキ「え!?ライチさん医者と掛け持ちでレストランの従業員もやってるんですか

!?

ラグナ「んな訳ねえだろ、どうせこの訳分からねえ企画の設定みたいなもんだろ」  
ツバキ「ああ、そうだったんですか……すみません、少し取り乱してしまいました……」

ノエル「それでお父さんが急にシャンパンをシャンパンでロケットを作って……」

ラグナ「お前の父親ホントに頭大丈夫か？」

???「ニヤニヤ!? いい人に乳の人……それに無い人に……なんだかいつばいいいるニヤスー!!」

ラグナ「うげ……この声は……」

タオカカ「ウニヤー! やっぱいい人だったニヤス！」

ラグナ「おお、タオ久しぶりだな。……というかお前なんでこんなカグツチから離れた

階層都市にいるんだ？」

タオカカ「ニヤ？ニヤんだか気が付いたらここに飛ばされていたニヤス。もう訳ワカメロールニヤス!!」

ラグナ「なんだそりや…。まあお前も勝手にこの企画に参加させられたんだな…」

タオカカ「ウソニヤス。ホントはウソの人（レリウス）に『後で良いものあげるからおじさんと一緒に来ないか』って鼻息荒く言われたからホイホイについて行っちゃっただけニヤス」

デデン 全員アウトー

ハザマ「あのエロ親父www何やってんだwww」

ツバキ「もうあの人の半径2メートル以内に入りたくないwww」

ラグナ「あいついつかホントに捕まるぞwww図書館のやつなのにwww」

スパーン

タオカカ「あ、そうニヤ。なんでいい人会ったか忘れてたニヤ。飯をおごれニヤ。」

ラグナ「おま、唐突だな……………あー…あいにく財布持ってねえわ…」

タオカカ「えー…じゃあ今度からいい人の事はふつーのごみに格下げニヤス！」

デデーン ハザマ アウトー

ハザマ「このバカ猫以外と黒いw w w w」

スパーン

タオカカ「なんでもいから食べ物をよくすニヤ!!もうタオは発狂スンゼンなのニヤス!!ここで暴れてしまうニヤス!!」

ツバキ「どうしますか?こんなところで暴れられても困りますし…」

ノエル「ハザマ大尉、行きますか?」

ハザマ「いやいや何がですか!?!わが身を捧げろつて事ですか?私絶対猫に殺されるだけは断固拒否ですよ!?!」

タオカカ「タオも緑の人は別にいいニヤス…」

ラグナ「……………うん…あ、そうだタオ!これ食うか?」スツ

【食いかけの超デカ肉まん】

ノエル「あ、まだ持ってたんですね、それ」

タオカカ「おお!!食うニヤス食うニヤス!!やっぱいい人はいい人だったニヤス!!」

ガツガツ ムシヤムシヤ

タオカカ「ふうー…まだまだいけるニヤスね…」

マコト「あの一つがバレエボールぐらいある肉まんをほぼ一口で…」

タオカカ「いい人、あとその他もろもろの人、ありがとうニヤス!!それじゃタオはカグツチに帰るニヤス!!」

ラグナ「帰るつつつても魔操船だろ?金あんのか?」

タオカカ「大丈夫ニヤス!魔操船にしがみつけばタダニヤス!!!」ドヤア

デデン ラグナ ツバキ アウトー

ツバキ「そんな渾身のドヤ顔で言われてもwww」

ラグナ「バカはみんな魔操船にしがみつくのかwww」

スパーン

三分後

ライチ「さ、皆ここが今日からみんなが働く場所よ」

『ファミリーストラン ココツス』

ラグナ「あー…『ココツス』かあ…まあ来た事ぐらいはあるな…」

ハザマ「『ココツス』ねえ…無難でいいと思いますよ?」

ノエル「『ココツス』かあ…」

ラグナ「ん?どうした?ノエル」

ノエル「私一回この手のファミレスでアルバイトした事あるんですけど、その時キツチンが爆発して…それ以来トラウマなんですよ…」

ラグナ「やべえこいつと一緒に絶対キツチンにいたくない…」

ライチ「はい、みんなー、まずはこつちよー!」

つづく

## 第六話 バング 「君はズバリ……………緑膿菌でござる!!!」

前回からのつづき

↳レストランココツス前↳

ラグナ「というか、ウエイトレスって事はさ、もういきなりこの服で接客とかしたりすんのか？」

ライチ「う〜ん…私もそうしてほしいのは山々なんだけれど…まずはこの裏にある研修室で色々勉強してもらおうと思ってるの」

ツバキ「ここ研修室なんかあるんですか……」

ライチ「ええ、それ程大それたようなものではないけれどね。それじゃ、早速この裏の研修室に……………とやりたいのだけれど…」

ハザマ「けれど？」

ライチ「ええ、このエリアの『ココツス』のリーダーがここの店長なんだけど、丁度いらっしやるから、まずはその方に挨拶しに行きましょうか」

ラグナ「それってまた歩くのかあ？」

ライチ「いえ、心配いらないわ。店長室もこの裏にあるから」

↳レストランココツス裏↳

ライチ「それじゃみんな、まずはここでスリッパに履き替えてもらえるかしら」  
ラグナ「おう」

ツバキ「……」

マコト「あれ？ツバキ、どうしたの？」

ツバキ「どうしたもこうしたも、私のスリッパだけ子供用のなんだけど…」

【くまさんがプリントされたスリッパ】

デデー<sup>ン</sup> ノエル マコトアウトー

ノエル「かわいいwww」

マコト「いいと思うよツバキwww似合ってるwww」



## スパーン

ツバキ「あのライチさん、なんで私だけこれなんですか？」

ライチ「ごめんなさいね。残ってるのがそれしかなくて…」

ツバキ「いえ、良いんです。そんなに大した問題ではありませんし」

ハザマ「そうですね、大した問題じゃないですよ」

ラグナ「そうかもしれねえな。……つーかテルミ、なんでお前さつきと上がらねえんだ？」

ハザマ「いや……あの…」

ハザマ「私のスリッパだけ無いんですよ……」

ラグナ「ぶふっwww」

デデーン　ラグナ　アウトー

ラグナ「テルミwwwお前さつきから扱い散々だなwww」

スパーン

ハザマ「あの、ライチさん…？なんで私のはないんですか？」

ライチ「それが、そのなんというか……紫色の髪の毛のいかにも偉そうな人が『緑膿菌のスリッパはこれか？スリッパが可哀そうじゃ』、とか言っって持つて行っちゃったのよ」

…」

ハザマ「帝の野郎……今度出合いがしらに邪翼崩天刃ぶちかましてやろうか…」

ツバキ「は、ハザマ大尉!」

ハザマ「冗談ですよ、冗談♪、そんな事する訳ないじゃないですか（半分本気だけどな!）」

ライチ「ハザマさん、ごめんなさいね。後で予備のスリッパがないか探してみるわね」  
ハザマ「すみませんねえ…気を使わしちやつて……」

ライチ「いえいえ」

。パタパタ　ペタペタ

ラグナ「中は結構暗いんだな……」

マコト「それにすごい静かだね…店内はすごい賑わってたのに…」ブルルツ  
ハザマ「だからって変な事言ったりしないてくださいいよ?」

しーーーーーん

ノエル（裏声）こっちでござるw wこっちでござるw w」

デデーン 全員アウトー

ノエル「いや、フリかなと思つてw w w w」

ラグナ「もうお前はしばらくマジで黙つてる!! w w w」

ツバキ「くっ…せっかく気持ちが悪く落ちて着いてきたのにw w w w」

スパーン

マコト「そろそろいい加減にしようか？ノエルン？」ビキビキッ

ノエル「ごめんなちゃーい☆」

ライチ「ほら、皆店長室に着いたわよ」

ガチャッ

ラグナ「誰なんだろうな、店長」

??? 「いやあ、よく来たね」

ハザマ（社長とかがよく座つてるあのでかい椅子に座つてなおかつ背を向けてるから誰か全く分からない……）

ツバキ（声色から察するに、男性かしら？）

??? 「君たちのはこちらも多く期待を寄せているんだ、頑張ってくれよ？」キイツ  
ラグナ（あ、こつち向いた…）

バング（スーツ姿）「私がこのエリアのココツスの統括部長この店の店長、シシガミ  
バングでござる!!」

ラグナ「ぶっは!!」ハザマ「ぐふっww」ノエル「ぶっww」マコト「んっくww」ツ  
バキ「ぷっくw」

ラグナ「知ってるわwww」

デデーン 全員アウトー

ハザマ「もういやというほど顔とイチモツ見させられたからなwww」  
ノエル「またこの人www」

スパーン

バング（スーツ姿）「どうしたでござるか？拙者の顔に何か付いてるでござるか」

ラグナ「いや、なんでもねえ…いや、なんでもありません、か…」

バング「そうでござるか？なら良いでござるが…：…これからよろしく」手をさしのばし

ラグナ「ああ…いやどうも…：…」ギョツ

バング「おお！そういえば忘れていたでござる!!」

ハザマ「急にどうしたんです？」

バング「この店では名前では呼ばずにそれぞれニックネームで呼び合っているでござる!!」

マコト「へえ…あ、じゃあ社長さんはなんて呼ばれてるんですか？」

バング「む？拙者でござるか？拙者のニックネームは『露出狂』でござる!!」

デデン ラグナ マコト ツバキアウトー

ラグナ「まんまじゃねえかwww」

ツバキ「あなたはそれで良いんですか？www」

スパーン

バング「ちようど一列に並んでいるから一人ずつ順番に行くでござる……ではその男なのにウエイトレス服きた頭のおかしいのから」

ラグナ「うるせえよ……」

ー三十秒後ー

バング「うゝむ……なんとも悩ましいでござるが……決まったでござる!!」

ラグナ「頼むからまともなやついしてくれよ……」

バング「君のコードネームは……『肉まん』でござる!!」

ラグナ「ん……まあ、悪くはねえ……のか？」

バング「次はその隣のスーツ姿で緑髪の君、よろしく」

ハザマ「いえいえ、こちらこそ」

バング「実は君のコードネームはもう会った時からもうティンと来ていたでござる!!」

ハザマ「は、はあ…（なんか嫌な予感するんですけど…）」

バング「君はズバリ……………『緑膿菌』でござる!!!」

ハザマ「ですよねー!」

デデーン ラグナ アウトー

ラグナ「理不尽すぎるwww」

スパーン

ハザマ「なんで緑膿菌なんだよ!!? 緑といたらもつとメロンだとか色々あるだろうが  
よおおお!!」クワツ

ラグナ「おい緑膿菌、店長だぞ。敬語使えよ」

ツバキ「そうですねよ緑膿菌、いくら大尉といえどもこの程度の事はしつかりしていた  
だかないと」

ハザマ「おまえらああ…調子に乗りやがって…!!」

マコト「緑膿菌大尉、あまり近づかないでもらえますか?においがうつるんで」  
ノエル「そう?そんなに変なにおいしないけど…」

ハザマ「(・ω・)」

ラグナ「…悪かったってテルミ、ちよつとオレらも調子に乗りすぎちまつたよ」  
ツバキ「私もすこし度が過ぎたかもしれませぬ…すみませぬ」

マコト「ごめんね、ハザマ大尉」

ノエル「なんかよくわからない、けど謝った方が良いのかな?」

ハザマ「いえ、ノエル嬢は結構です…」すつく

ハザマ「私も少し未熟なところもありましたし…今回はいいですよ…」

ラグナ&ノエル&ツバキ&マコト「ありがとう、緑膿菌!!」

ハザマ「ちよつと…泣いてきていいですか?」

〳五分後〳



バング 「もういいでござるか？」

ハザマ 「はい：もう大丈夫です」

バング 「それではそのリス系の亜人の君」

マコト 「あ、はい」

バング 「君には、食べ物に關したコードネームにするでござる」

マコト 「あ、意外と普通かも」

バング 『『マロン』、はどうでござるか？』

マコト 「あ、なんか可愛い！しかも私の大好物だし！！」

バング 「それは良かったでござる！…そしてその…黒タイトの君…」

ツバキ 「…普段はこんな服じゃないんです…」

↳二分後↳

バング 「君のコードネーム、これはなかなか自信作でござる」

ツバキ 「はあ…」

バング 『『72』、でござる』

ツバキ 「くっ」

マコト 「どうしたの？ツバキ」

ツバキ「なんか、自然と声に出ちゃって…」

バング「それでは、これで全部でござるな！みんな、お疲れでござる!!」

ノエル「え？いや私…まだ…」

ライチ「それじゃみんな、次の場所に行きましようか」

ノエル「え、いやだから私……」

ライチ「？」

ノエル「…いえ、なんでもないです……」

つづく

## 第七話 イグニスⅡクローバー「うふふつよろしくね？」

前回からのつづき

マコト「ほらほらくノエルン涙拭きなよ〜」

ノエル「…うえつ、ひぐ…：…こんな扱い、慣れてるし…：…学校にいた時もこういう事…！一度や二度じゃなかったし…：…！ひっぐ…」

ライチ「あらあら〜…：…これは泣き止むまで少し待った方が良いかしらね〜」

ノエル「ううううう…：…」グスツ

ラグナ「おい、いつまで鼻水垂らして泣いてやがんだ」

マコト「ちよつと〜、そういう言い方はないんじゃないの？ノエルンは確かにバカで何もできないし一緒にいるだけでイライラする事もあるでしょうも無い娘だけどさ  
！」

ノエル「うわああああん!!!」ビエエ

マコト「ほらも〜! ノエルンまた泣き出しちゃったじゃん」

ラグナ「今のは九割九分九厘てめえのせいだ!!……………ほら、これで涙を拭け」  
スツ

ノエル「うえ?…」ズズツ

ラグナ「洗って返すなんて事はしなくていいからよお、というかこれが終わったらまた敵同士みたいなもんだから無理か……。まあなんにしてもハンカチはやるからな」

ノエル「え…でもそんな、私」ズズツ

ラグナ「しゃべる暇があったらそれで顔拭けよ…何のためにやったと思ってるんだ」

ノエル「あ、そ、そうですね…じゃあ……」

チーン

ラグナ「うげっ…このアホ! オレは顔拭けって言ったんであつて鼻をかめとは一言も…まあいいや、役に立って。」

ノエル「あ、あのラグナさん、これ! ありがとうございます。」

## 【ノエルの鼻水付きハンカチ】

ラグナ「」

ノエル「これが終わったら、もういつ会えるかも分からないじゃないですか。だ、だから、今の内に返しちやおつかかな、なんて思いまして…エヘヘ」

ラグナ「うん、オレも他人の鼻の粘膜液でグチヨグチヨじやなければ快く受け取ったんだけどね…もうどうでもいいや…」

ライチ「それじゃ、次のところにも良いかしら？」

ラグナ「ああ、もう大丈夫そうだ」

↳廊下↳

ハザマ「お次はどこに行くんですか？」

ライチ「次はこの店、いえこの業界でもかなりの実力を持ったウエイトレスに会えるわよ」

ツバキ「そ、それはすごく光栄な事ですわね…！」

ラグナ「実力のあるウエイトレスか…」

ヴァルケンハイン『お客様、席はこちらでございます…』

ラグナ「あり得るな…いや、もしくは…」

プラチナ『ご、ご主人様…！せ、せ、席はこちらでございます…き、今日はご主人様にいっぱいご奉仕しちゃうからな…／／』

ラグナ「ああ…最高だな…じゃなくて！」

ハザマ「さつきから独り言言つてどうした？医者に診てもらうか？幸い目の前にいるぞ？」

ラグナ「大丈夫だ。後オレはロリコンじゃねえ」

ハザマ「はあ？」

ライチ「…と、ここよ」

コンコン

ライチ「すみません、以前お話しした新人の子ですが…」  
???「ああ、そういえば聞いていたわね。フフ…通してあげて？」

ラグナ（声だと20〜30代の女性か?…別に残念だという訳じゃねえが…）  
ツバキ（すごいきれいな声の人ね…きつと容姿もきれいな人なんだろうなあ…）  
ハザマ（あれ?この声聞いたことあるぞ?誰だっけ?）

ガチャツ

イグニス「クローバー」「うふっよろしくね?」

デデン 全員アウト

ラグナ「ニルヴァーナといい、wwこいつといいwwwなぜ喋れるwww」  
ハザマ「そうだったwwwどおりで聞き覚えのある声だと思ったww」  
ツバキ「うっわwwお肌すっごいツヤツヤww」

スパーン

イグニス「あなた達が今日からここで働く新人の従業員とは聞いているわ。」  
マコト「はあ…」

イグニス「ところであなた」ツバキ指さし

ツバキ「は、はい!!何ででしょうか!？」

イグニス「少し曇った目をしているわね。少し疲れてるんじゃないかしら?」

ツバキ「!?…そ、そうですね。少し疲れてるかもしれませんが…:…:…:というかよく分かり  
ますね」

イグニス「私、人の目を見るのが好きなの。その人の生き方とか、今までの事がわかるから…」

ノエル「へえ…」

イグニス「だからあなた達の目を少し見せてくれないかしら?」

マコト「別にいいですけど…」

イグニス「ありがとう、それじゃ端のあなたから」ズイツ

ラグナ「うおっ(顔近っ)」

イグニス「…:…:ふん、そう…:なるほどね…」

ラグナ(ヤバイロボットだと思ってたけどこの人かなり良い匂いする…!)



イグニス「…ありがとう」スツ

ラグナ「やつと終わった…」

イグニス「過去に色々かつらい事があったのね…でもめげちゃダメよ？止まない雨はないんだから」

ラグナ「目え見ただけでそんなとこまで分かるんですか？」

イグニス「ええ、慣れてくると」

イグニス「次はあなたね」

ハザマ「ハハ、なんか照れてしまいますね〜」

イグニス「そんなに緊張しなくても大丈夫よ…：失礼」

ハザマ「？」

イグニス「かあああ…ペっ」

べちや

ハザマ「…」

デデーン ラグナ ノエル マコト ツバキアウトー

ラグナ「タン…じゃなくてオイル吐かれたぞwww」

ノエル「しかもきれいにハザマ大尉の足にwww」

イグニス「ごめんなさい…ちよつと溜まって…」

ハザマ「い、いえ良いんですよお…」ヒクヒク

ノエル「あんな事されても怒らないなんて…」

マコト「ホントに紳士的だね〜ハザマ大尉は」

イグニス「あなたの目はあなたの前世を映しているわ」

ハザマ「は、はあ…」

イグニス「これは…なにかしら?…:緑膿菌?」

デデン ラグナ ノエルアウトー

ラグナ「お前前世でも報われねえなあwww」

スパーン

ラグナ「あー…いてえ」

〜五分後〜

イグニス「あなたが最後ね」

ノエル「あ、はい…よろしく…お願いします」

イグニス「どれどれ……」ギユツ

ノエル「ひぎい!?!」

イグニス「あなたの目、とても澄んでいるわね……まるで人形みたい……」ギユウツ  
ノエル「は、はひ……そ、そうですかあ?それは嬉し……!」

イグニス「ありがとう。あなた達ならこの先、やっていけそうよ。用事は済んだから帰っていいわよ?」

ライチ「貴重な時間を割いて頂き、ありがとうございます。……ほら、あなた達もお礼」  
五人全員「ありがとうございます」

バタン

ラグナ「次はどこ行くんだ?」

ライチ「この後は研修室でしばらく休憩よ」

ノエル「やったー! やつと休める〜」

ハザマ「ホントに休憩できればいいんですけどねえ……」

つづく

## 第八話 本文：たすけテ ツれてかレタ

前回からのつづき

ガチャツ

ライチ 「ここが今日からあなた達が使う研修室よ」

ツバキ 「想像していたのより、ずっと立派……」

ライチ 「当たり前よ。ココッスは新人の育成にも力を入れているんだから」

ラグナ 「研修室にDVDプレイヤーあるし……」

ノエル 「こんなものもありましたよ？」

【バングの顔写真】

デデーン ラグナ ハザマ アウトー

ラグナ 「だからこういうの新人育成の何に使うんだよwwww」

スパーン

ハザマ 「毎朝これに向かって拝んだりするんじゃないのか？」

ラグナ 「どこの宗教だよ……後ノエル、それは破壊力があるからなるべく目につかない

ところにも置いてくれ。絶対にお面みたいに使うんじゃねえぞ？」

マコト「なあんだ、残念♪」

ライチ「それじゃ私は別の仕事があるから一旦離れるけど、あなた達は次の仕事まで各々自由にしてきてくれていいわよ？」

ラグナ「そいつはこの部屋から出てもいいのか？」

ライチ「うゝゝん：原則としてはダメなのだけれど、トイレとかなら大丈夫だったはずよ？…あ、ちなみに場所はここの廊下を突き当り右だから」

ツバキ「色々とありがとうございます…。お仕事頑張ってください！」

ライチ「ええ、ありがとう」

ガラツ バタン

~~~~~

—五分後—

ノエル「ツバキー、そこのお菓子取ってー」

ツバキ「色々の種類があるのだけれど…どれがいいかしら？」

ノエル「じゃあバームクーヘンで」

マコト「あ、私もそれで!!」

ツバキ「投げるから、ちゃんと取ってね?……はいっ」ぽーい

ノエル&マコト「ありがとうー」モグモグ

ラグナ「あいつらフツーにくつろいでんなあ……」

ハザマ「全くのんきな奴らだあ……いつ笑いの刺客が来るとも限らねえつてのによお」

ラグナ「でもかれこれ十分ほど経つが、まだ一回も変な事は起きてねえからな、あいつらが油断するのも仕方ねえ………あ?」

ハザマ「あん?どうした」

ラグナ「いや、そういや今日の朝から携帯いじってねえなと思つて見てみたらなんかメールが来てるからさ……」

ハザマ「よくある事だな。……で誰からだ?」

ラグナ「待つてろ、今確認を………レイチエルからだ……」

ノエル「ええ!?ラグナさんレイチエルさんとメアド交換してたんですか!?!」

ラグナ「うおっ!?!急に話題に入ってくんじゃねえよ」

ノエル「いや、アハハ……気になって………というか何で!?!」

ラグナ「オレの意志じゃねえよ、あいつが無理矢理したんだよ…」

ハザマ「うっはw積極的」

ラグナ「あ、お前今…」

ハザマ「私はいつも含み笑してるような顔だから見逃したようですね」

ラグナ「そんなのアリかよ…：…：…というかその事なんだがな…」

　　数か月前　レイチエルの小ぎれいな城へ

レイチエル『ラグナ、あなたそういえばケータイ持ってたわよね？』

ラグナ『あ？ああ、通行人からかつぱらったもんだけどな』

レイチエル『どっちでもいいわ』

ラグナ『で？それがどうしたんだ？』

レイチエル『私のメールアドレスを入r…：ラグナ『断る!!』』

レイチエル『あら、どうしてかしら？あなたに悪い事はないはずよ？もし望むならこの私がお寝坊さんの下僕にモーニングコールをしてあげても良いのに…』

ラグナ『誰が下僕だ!!っーかなんで朝からお前の皮肉じみた声を聞かなきゃならねえ

んだ！後、オレは寝坊なんかしてねえ！』

レイチエル『…どうしても交換する気は？』

ラグナ『毛頭ねえな』

レイチエル『そう……』

ラグナ（あん？今日はやけに諦めが早いな…）

レイチエル『ラグナ…』スツ

ラグナ『なんだよ……言つとくが何言われても入れる気はねえからな』

レイチエル『さっきから遠目でよく分からないのだけれど、金髪の青年がよだれを垂らしつつ時々『ハアツ→』って言いながらあなたの昨日はいたシャツを舐めまわしつつこつちを見るのだけれど……』

ラグナ『おいゴルアアジン!!あれほどもしシャツ盗るときはもう使わない使い古したやつをとれつつただろうがあああ!!』バツ

レイチエル『今のうち、かしら』ゴソゴソ

ラグナ『…どこにもいねえじゃねえか…あのクソ弟……どうしたレイチエル？』
レイチエル『ラグナ、これが何かわかるかしら？』スツ

【薄汚れたケータイ】

ラグナ『あ!?!いつの間に!?!…つーか、騙しやがったな!!』

レイチエル『ホントにあなたって単純ね、…それじゃ終わったら返しとくわ』

ヒュン

ラグナ『あ、おいコラ!……つたく……ブロックしとこ…』

ヒュン

レイチエル『そんな事したら、五臓六腑七里にばら撒いて野犬のエサにするわよ…?』

ラグナ『!?!』

ヒュン

ラグナ『き、気のせいか……………ブロックするのはやめておこう…』

くくくくくくくくく

ラグナ「と、いう事があったんだ」

ハザマ「回想なげえよ…」

ノエル「そんな事より、メールみましょうよ!」

ラグナ「ああ、そうだな。どれどれ…」

To:ラグナ

本文:たすけテ ツれてかレタ

ラグナ&ハザマ&ノエル「(。D。;)」

ハザマ「色々はやべええええ!!」

ノエル「これ、レイチエルさん大丈夫:なんでしようか?」

ラグナ「……ハア、気にする事あねえよ。どうせこれもまたあいつのイタズラかなんかなんだろ?」

ノエル「で、でも……ちよつとは心配とかはしないんですか?」

ラグナ「考えてみる、あいつがそんなじよそこの奴に負けて捕まると思うか?それにあいつにはあのクソジジイが付いてんだぜ?どうみてもありえねえよ」

ハザマ「ありえねえな………ん？でも確か……」

く 昨日 帝の部屋く

帝「緑膿菌、レイチエルⅡアルカードをどう思う？」

ハザマ「なんですか急に……後私はハザマです！さらつと当たり前のように言わないでください！」

帝「うむ、分かった。で、どう思うのじゃ？」

ハザマ「絶対こいつ分かって無えよ……あー、そうですね……一般論で言うとした感じはいかにも清楚なお嬢様って感じじゃないんですか？実際は雲泥の差だが……」

帝「ふむふむ……なるほど……普段清楚な感じの人が我を忘れて乱れくるっている姿が視聴者にはウケが良いと……」メモメモ

ハザマ「ちよつとちよつと!?何訳の分からない事メモしてんですか!?!」

帝「参考になった。礼を言うぞ、緑膿菌」

ハザマ「あ、いえ。恐縮です………ってだから名前!!」

く
く
く
く
く
く
く
く
く
く

ハザマ「あ、ヤベエなこれは…」

ラグナ「どうしたんだ？」

ハザマ「なあ子犬ちゃん、そのメール、いつ送られた？」

ラグナ「あ？あー…今日の6時50分だな」

ノエル「この企画が始まる10分前ですな」

ラグナ「……………お、お前…計算…できたのか？」

ノエル「い、いくらなんでもバカにしすぎですよ!!？」

ハザマ（はい確定しました。今後絶対にいつかあのクソウサギが来るな…）

マコト「あゝ…暇なんもする事がなくい！」

ツバキ「あそこに本棚があるわよ？」

マコト「いやあれ経営がどうたらとか営業の基本だとか難しい事ばっかなんだもん

…」

ラグナ「なあ、おまえら」

ハザマ「なんですか？」

マコト「なんか面白い事でも思いついたの〜？」ホジホジ

ラグナ「引き出しの中調べてみねえか？」

つづく

第九話 ラグナ「ハザマⅡ緑膿菌の定理」

前回からのつづき

ハザマ「あ？なんでまた」

ラグナ「いやさ、かれこれ三十分近くここにいるが誰も引き出しを開けようとしなからよお……」

ツバキ「何も必ず開ける必要もないと思うのですが……」

マコト「それにさつきまでの見てきたでしよ？絶対中にかなりヤバイものが入ってるに違いないよ」

ラグナ「でもさ、気になるだろ？」

ツバキ「うぐ……た、確かに……」

ハザマ「確か打ち合わせでは爆発物だとか劇薬だといった危険なもの使わないという話でしたし、そこまで気を付ける必要ありませんし……」

ノエル「逆にもしかしたら役に立つアイテム的なものが入ってるかもしれない！」

マコト「と、いう事で……」

ラグナ「じゃあ決まりだな。どの順番で開けていくか？」

ツバキ「では、位置的に私から順に、マコト、ノエル、ラグナ、ザ、ブラッドエッジ、
緑 n : ゴホン : : : ハザマ大尉の順で良いと思うのですが」

ラグナ「ああ、それで構わねえよ」

ハザマ「私もそれでいいと思いますよ。後さつき…」

ツバキ「気のせいですよ」ニコツ

ハザマ「ハア…もういいです…もう何言っても無駄だとわかりましたから…」

ツバキ「じゃあ、一段目からゆっくり開けますね？」

マコト「むしろいきなり開けられてもリアクションに困るしね」

ラグナ「リアクションで…お前完全にこの企画楽しんでんか…」

マコト「そりゃあ笑わない程度に目一杯楽しまなきゃ!!」

ノエル「マコトは全然叩かれてないから言えるんだよ…50回過ぎたあたりから私
もうお尻の感覚がマヒしてきたよ…」

ラグナ「お前ら情けねえな。オレはもう80超えてるつてのに」

マコト「それはラグナさんが極端に笑いの沸点が低いだけだと思っただけ……」

ラグナ「ああ……そうかもしれない……おかしいな……昔はこんなにすぐ笑う事なかったんだがなあ……」

ハザマ「年取つて落ち着いてきたんじやねえの？」ニヤニヤ

ラグナ「バカ野郎、オレまだ2×歳だぞ？まだ若い部類に入る。まだまだ現役だよ」

ツバキ「……あの……そろそろ引き出し開けていききたいんですけど……？」

ノエル「あつゴメンゴメン！」

ツバキ「ふう………それでは、一段目……！」

ガラツ

ハザマ「……どうですか？」

ツバキ「何もありませんね……」

マコト「な〜んだ！期待して損した〜」グデー

ツバキ「いえ、もしかしたら下の方に……」

ツバキ「…っ!!」

ガラツ ガラツ ガラツ

ラグナ「!?どうした!?何か入ってたのか?」

ツバキ「ええ…こんなものが…」スツ

【謎のDVD×2枚】

マコト「うあうあー!!いかにもってやつが出てきちやったよ!!」

ハザマ「っていうかDVDなんてどこで…あ、よく見たらまえのテレビの下にDV
Dプレイヤーがあるし………」

ツバキ「どうしますか?い、今見ますか?」

ハザマ「いえ、まずは全員の引き出しを確認してからにしましょう。」

ツバキ「そうですね…急いでも良いことはありませんし…」

ノエル「ツバキ、下の方は?」

ツバキ「今調べるわ」

ガラツ ガラツ

ツバキ「私の中に入ってたのは、このDVDだけだったわ…」

ラグナ「んじゃ次は、あんただな」

マコト「はいはい！それじゃマコトⅡナナヤ、いつきまゝす！」

ラグナ「だからお前その変換……………」

ガラツ

マコト「うおっ!?一発目からなんかある!!」

ツバキ「…スイツチ、かしら?ボタンの部分に何か書いてあるわね」

ハザマ「どれどれ、マンガとかでアホな研究者が使う自爆ボタンのボタンに『超』と書かれていますね…」

【謎のボタン『超』】

ラグナ「このボタンも…………見送った方がいいな…」

ハザマ「そうですね…もしかしたら似たようなものが出てくるかもしれませんし……………」

ガラツ　ガラツ

マコト「ん?」

ノエル「どうしたのマコト?」

マコト「いや、最後の引き出しのところにあったんだけどさ……」ドサツ

【北〇の拳】

デデーン ラグナ ハザマ アウトー

ラグナ「くそwww不意を突かれたwww」

ハザマ「しかもこれ1巻から最終巻まで全部あるしwww」

スパーン

ラグナ「あー、やべえ……このままいったらオレが一位独走なんじゃねえか……？」

ハザマ「そうだな……まあ一位になっても何ももらえねえけどな」

マコト「まあ、私のところにはこれぐらいしか入ってなかったよ」パラツ

ラグナ「もう読んでるし………ボタンはほつとくとして、次ハザマいつてみるか？」

ハザマ「ええ、そうですね。こういうのはさっさとスピーディーに済ましてしまうのが一番ですしね」

ハザマ「……」

ガラツ ガラツ

ハザマ「ハア……」

ラグナ「どうした？なんかあったか？」

ハザマ「ああ、しかも……」 トンツ

【謎のボタン『ア』】

ツバキ「お、同じものが二つ!？」

ハザマ「いやよく見てください、ボタンに書かれているものが違います」

ノエル「何か関係があるかもしれないね……」

ハザマ「それにしても『超』と『ア』、全くという程関係性がわかりませんし、なににより無暗に動いたってかえってアウトを増やすだけかもしれないし……このボタンも後に見送りとという事で……」

ラグナ「そうだな……というかテルミ、お前まだ全部引き出し調べてねえだろ」

ハザマ「ああ、今調べるところだ」

ガラツ

ハザマ「おおっと、これは？」

マコト「なんかのパネル、かな？」

ノエル「？、でもこれも書かれていませんよ？」

ツバキ「待ってこういうのは裏返しだという可能性も……クルツ全員「……………」」

【ハザマと緑膿菌の合成写真】

デデーノ ラグナ ノエル マコト ツバキ アウトー

マコト「パネル一杯に大量のハザマ大尉の顔がwww」

ラグナ「ぶっちゃけ言うと、フツーにきめえwww」

ツバキ「しかもこれ顔が一つ一つ違っていきますよwww」

ノエル「何この無駄なクオリティwww」

スパーン

ハザマ「(・ω・)……………」

ラグナ「もしかしたら広まるかもな、ハザマ||緑膿菌の定理……」

ハザマ「そんな不名誉な定理是が非でも広まるの阻止しますよ!!」

マコト「そんな事より引き出しの中身はどうでしたー？」

ハザマ「聞けよコラア……まあ中にはこれぐらいしか入ってませんでたよ……」

ラグナ「そうか、それじゃ……」 パネルヒヨイツ

ハザマ「あ？そのパネルどうすんだ？」

ラグナ「よし、これでよし！」

【バングの顔写真】 【ハザマと緑膿菌の合成写真】

デデーン ノエル マコトアウトー

ノエル「なんでわざわざバングさんの横に置くんですかww破壊力上がるじゃないですかww」

スパーン

ラグナ「よし、じゃあ次はオレだな！ガツとやってサツと終わらせるからな！」

ノエル「おお！カッコいいです!!」

ラグナ「じゃあいくぞ!!」

ガツ

デデー ラグナ アウトー

デデー ハザマ ノエル アウトー

ハザマ「言ったそばから出落ちしてんじゃねえよwww」

スパーン

ツバキ「引き出し開けた瞬間笑ってましたけど…何があつたんですか?」

ラグナ「い、いや、マジやめとした方がいい…これはヤバイ…」プルプル

ハザマ「それはただ単に子犬ちゃんの笑いの沸点が低いだけだろう?」ヒヨイ

マコト「そーだよー、私達にも見せてよー」ヒヨイ

ノエル「私、とても気になります!!」ヒヨイ

【滅茶苦茶リアルなラグナ&ハザマフィギュア】

デデー ハザマ ノエル マコト ツバキ アウトー

ラグナ「だから言ったのに……」

スパーン

ツバキ「そ、それにしても、体の細部にまでしっかりこだわって作られていますね…」

マコト「という事は服の中とかもリアルな事になってんじゃない？」

ラグナ「絶対にながすがすなよ……ほら貸せ。それは危ないからちやんとハザマの机の上に置いとくから」

ハザマ「いや、その理屈はおかしい」

ラグナ「アウト連発するよりはマシだろ？それに今お前が一番アウト少ないし……」

ハザマ「これでアウト量産しろと？」

ラグナ「見なけりやいいんだよ、見なけりや」ゴソゴソ

ハザマ「ハア……良いですよ。でも私簡単に笑うような人じゃありませんからね？」チ
ラッ

【ハザマのフィギュア↑M字開脚】

デデーン ハザマ アウトー

ハザマ「おいコラアww誰がポーズ変えて良いって言ったwww」

ラグナ「え、だってお前が日ごろしている姿の方がリアリティ出ると思ってる……」

ハザマ「こんなバカげたポーズ誰が取るか!!」

スパーン

ツバキ「ハザマ大尉……いつもあんな事やってるんですか……？」

ハザマ「根も葉もないデマです!!」

ラグナ「最初は誰でもそう言うよねえ」

ハザマ「てめえはもう黙ってる!!」

ガラツ ガラツ

ラグナ「んー、オレのそこにはこのキモイ人形しか入ってなかったな」

マコト「じゃあ次はノエルだね！」

ノエル「ホントは私はマコトの次なんだけど、ナチュラルにスルーされた時はどうしようかと思ったよ……」

ガラツ ガラツ

ノエル「？」

マコト「なんか入ってた〜？」

ノエル「…こんなのが……」ポイ

【魚肉ソーセージ】

ラグナ「これは…また…なぜ？」

ハザマ「腹が減ったら食えって事なんじゃねえかあ？」

ノエル「わ、私今はいらなから冷蔵庫にでもしまっておきますね」

ラグナ「んで、いまだによく調べれていないのが…」

【謎のDVD×2枚、謎のボタン『超』、謎のボタン『ア』】

ハザマ「ヤバい匂いしかしねえ…」

つづく

第十話 レイチェル「どうも☆」

く前回からのつづきく

ラグナ「それで、何から行く？」

マコト「順番で行くと、DVDなんだけ、ど…」

【謎のDVD×2枚】

マコト「うくん、後回しにしようか？」

ハザマ「そうですね、何もそんなに死に急ぐ必要ありませんからね？」

ラグナ「死ぬこと前提なのかよ…まあいい。それで、残るはこの二つのボタンなんだが………」

ノエル「どっちから行きますか？」

ラグナ「まあそういう事だよなあ…」

マコト「いつその事二つ同時に押すってのはどうかな！」

ツバキ「笑えない冗談ね」

マコト「アハハ…」

ラグナ「それにしても……このボタンの言葉、どういう意味なんだ？」

ハザマ『『超』と『ア』……『超』は……超越？ いや超過……？』

マコト『『ア』は一杯あるよ！アールとかア○顔とか……』

ラグナ「それ以上言ったらぶっ飛ばすぞ……？ OK？」

マコト「す、すみません……」

全員「……………」

ラグナ「もう……一旦、押そうか？」

ノエル「そ、そうですね……考えてても始まらないですし」

ハザマ「これで一発ドカンと後腐れなくしちまった方が手っ取り早いしなあ」

ラグナ「それじゃ、オレが押すけど、文句ねえよな？」

ツバキ「はい。仮にそれが爆発しても、被害を被るのはラグナ⇨ザ⇨ブラッドエッジ、あなただけですしね」

ラグナ「おおう……怖い事言うんじゃないよ……それじゃ、まずはこの『超』のやつから行くからな？ 文句はねえよな？」

マコト「良いから早く押してよー」

ハザマ「もし爆発とかしても、no problemだ！（オレ達は関係ない）」

ノエル「ちゃんと骨は拾いますから！」

ラグナ「お前ら………あー、もういいや……じゃあいくぞ!!」

ポチツ

~~~~♪

ラグナ「あん？急にどっかで聞いたことのあるメロディが……」

ツバキ「これって確か……」

カパツ

マコト「あ、天井が抜けた」

シユタツ

ノエル「なんか人が降ってき……」

レイチェル「ゆう~~~~めえじゃ~~~~ない、あるえもこれも~~~~♪」

ラグナ「ぶつwww」

ハザマ「ここできたかwww」

――すでに笑いましたが、引き続きお楽しみください――

レイチエル「その手ええええでドアをあけいましてよおおお〜♪」

ノエル「わあ…レイチエルさんノリノリですね！」

ラグナ「いやよく見ろ、顔これでもかという程真っ赤になってるから」

ハザマ（また新たな犠牲者が……）

レイチエル「しゅうくうふうくが、ほうしいのならあああ〜♪かなしいみを  
知り、ひとおおりで泣きましょおおお〜♪」

ツバキ「これ、ある意味黒歴史ですよね……」コソコソ

ハザマ「本人が知ってるかどうかは知らねえが、これ一応全国放送するらしいからな  
…」

マコト「えっホントに言ってるのそれ!？」

ハザマ「しーっ！声が大きいですよ…」

レイチェル「そして…かが…やく…」

レイチェル「ウルツ」バツ

レイチェル「トラツ」ビツ

レイチェル「ソウツ」シュバツ

レイチェル「へあい!!」ズビシツ

全員「(。D。) ……」

レイチェル「どうも☆」

デデーン 全員 アウトー

ラグナ「『超』ってこれかwww『ウルトラソウル』のことかwww」  
ハザマ「メチャクチャな変化球でしたねwww」



ノエル「これはムリｗｗｗｗ」

スパーン

レイチエル「……………／／／」

ガラツ  
バタン

ツバキ「やっぱり帰るときには無言ねのね…」

マコト「…にしてもさー…」チラツ

【謎のボタン『超』】

ラグナ「やばかったな…多分全裸ニンジャの次ぐらいは破壊力があつただろ…」

ツバキ「もうこれは発動しないんですかね？」

ラグナ「試すなよ？」

マコト「先生、それはフリですか？」ウズウズ

ラグナ「フリじゃねえ、言えばいっほどうれだが絶対フリじゃねえからな!?!だからその高く振り上げたその腕を下ろせ…」

ハザマ「そうですよ、ナナヤ少尉、」

マコト「はあい…」

ハザマ「それにしても…これといいさっきの写真といい…全く、悪意の塊です…」

ラグナ「ああ、そうだな…」

ハザマ「悪意の塊です…!!!」

ポチツ

ラグナ「あつ！このバカ!!」

~~~~~♪

ノエル「あ、また始まった」

ドタドタドタ…

ラグナ「おお…なんか騒がしいな…」

レイチェル「ハアツハアツ…とうつ」

シユタツ　グキツ

レイチェル「つたい…めくくじやない…ハアハア…あれもこれもくく」

ラグナ「なんかさつき嫌な音しなかったか？ w w」

ハザマ「オレも聞こえた……つーかもうヘトヘトじゃねえか w w」

ツバキ「しかも最初の歌詞歌えてないし……」

~~~~~

レイチエル「ハアハア……そして……かが……やく…………スー、ハー」

レイチエル「ウルツ」 バツ

レイチエル「トラツ」 ビツ

レイチエル「ソウツ」 シュバツ

レイチエル「へあい!!」 ズビシツ

ハザマ「これはただ純粹に拍手を送りたいですねえ……」

ラグナ「ああ……そうだな」

レイチェル「ハア…ハア……………ふう」

レイチェル「…どうも☆」ニコツ

全員「おー」パチパチ

ガラツ バタン

デデー<sup>ン</sup> ラグナ ハザマ アウトー

ラグナ&ハザマ「あ、やべ笑ってたの忘れてた」

スパーン

ノエル「でもすごかったですね、さっきのレイチェルさん！」

ツバキ「なんとというか、役者魂！って言うのかしら？気迫がすごかったわね……」

ラグナ「あ、後テルミ、次やったらガントレットハーデスじゃ済まねえからな？」

ハザマ「わ、分かっていきますよ…そこまで私もアホな事しませんって…」

マコト「じゃ、次はこれだね！」ドンっ

【謎のボタン『ア』】

ラグナ「だろうなあ……なあ押さないって選択肢は？」

ハザマ「企画上そんな事が許されるとでも？」ニコオ……

ラグナ「おう……分かったからその気色悪い笑みやめろや……じゃあ押してみたいやついるかー？」

ノエル「はい！ノエルやりたいです!!」

マコト「お、いつになくノリ気だね〜ノエルン」

ノエル「うん！なんか楽しそうだし!!」ワクワク

ラグナ「じゃあ……ホイ」

ノエル「じゃあ……コホン……ノエルⅡヴァーミリオン、行きます!!」ポチツ

デデーン ノエル アウトー

ノエル「……へ？」

スパーン

ノエル「いった!？」

ツバキ「ねえノエル、今あなた笑ったかしら？」

ノエル「ううん!!全っ然笑ってなかったよ!？」

マコト「誤反応かなあ……ちよつと私が押してみるよー」ポチツ

デデーン ノエル アウトー

ツバキ「また!？」

スパーン

ノエル「ううう…私笑ってないのに……」グスツ

ラグナ「なあ、さつきから薄々気づいてただけどき…」

ハザマ「それ、ヴァーミリオン少尉が『アウト』になるボタンなんじゃないんですか

？」

マコト「あ、ああ!じゃあこれ『アウト』の『ア』だったんだくく」ポチポチツ

デデデデーーン ノエノエル アウトー

マコト「あ、ごめーん☆一回多く押しちゃったー」  
ノエル「この、鬼！悪魔！マコトオオ!!!」

スパパーン

くくくくくくくくくく

ノエル「もうこのボタンはゴミ箱にでも突っ込んでください!!!」ドンツ  
マコト「ごめんねくくノエルン、今度マロンパフェおごつてあげるからく！」  
ノエル「う………た、食べ物なんかじゃ許さないからね!!!…でもマロンパフェはもら  
おっかな……」

マコト「もくく欲張りだな」ボタンをゴミ箱にポイツ  
ラグナ「あ、バカ!!投げ入れたりなんかしたら……」

マコト「え？」

ポチツ

デデーノ エル アウトー

ノエル「やっぱりマロンパフエなんかじゃ許さなーーーーーい!!!」

スパーン

つづく



## 第十一話 ツバキ「あ、アワビおいしい……」

く前回からの続きく

ライチ「みんなく、ちよつと良いかしら……？そのケツだけ星人はだれかしら？」

ノエル「ケツだけ星人じゃないです……ノエルⅡヴァーミリオンです……」

ライチ「あらごめんなさい。いかにも女性とは思えないほど品性を欠いただらしない姿をさらしているから判断ができなかったわ、悪く思わないでね？」

ノエル「そこまで言わなくても……うう……」グスツ

マコト「おおよしよし、いい子だから泣き止みな。泣き止むまで私がなでなでしてあげようケツだけノエル……」さすりさすり

ノエル「元はといえればマコトのせいでしょ!?後さりげなく私のおしり触るなあ!!微妙に手つきがいやらしい!」ドドカッ

マコト「ひでぶっ」

ラグナ「おお、キレイに二度蹴りが決まったな」

マコト「問題ないよ……ラグナくん……」

ラグナ「……?」

マコト「蹴られるだけの価値はあったからさあ……」ニヘラア

ツバキ「女性がしていい顔ではないわよマコト……」

マコト「うへへネエチャンええ尻しとんの〜」ワキワキ

ノエル「イヤーー!!こっち来んなバカマコト!」

ライチ「あらあら、ここには女性としての自覚も持たずにただ三大欲求に走るクソの  
ようなものもいるのね、将来が楽しみだわ」ウフフ

ハザマ「ラ、ライチさんさつきから齒に衣着せぬ物言いですねぇ……」

ライチ「あら、日ごろは基本このしゃべり方よ。最近は仕事の時とで使い分けるのが  
面倒だからずっとこんな感じよ」

ハザマ「えっ、じゃあ患者さんに対してもこんな風に接してるんですか?」

ライチ「ええ、最近は『むしろこの罵られるような感じが良い！今後もこんな感じでオナシヤス!!』っていう男性の患者さんが増えてきているから私としては嬉しい限りよ」  
ハザマ「は、はあ…（カグツチおわってるな…）」

ライチ「あ！そうだったわ、こんな事で一々時間を無駄にしている暇なんか無いんだったわ」

ノエル「…私達のメンタルを削る以外にもまだなんかあるんですか…」ジトツ

ライチ「ええ勿論。そろそろお昼の時間帯でしょ？だからあなたたち全員分のお昼ご飯を持ってきてたのよ」

ノエル「わーいお昼だ〜」

ラグナ「回復はやいな、おい…さっきまでダウンしてたのに…」

ノエル「私、ご飯前と仕事が終わる五分前はすごい元気になるんですよ？」

ライチ「あらあら、三大欲求に忠実なノエルちゃんは日常生活でもその程度の時にし

か日ごろの喜びを感じる事ができないのね」

ノエル「うぐつ……ラグナくん……ライチさんがいじめるく〜」

ラグナ「さっきの元気はどこ行った!？」

ツバキ「あの、ライチさん勿論その昼食を頂くためにはやはり何か試練的なものか何かがあったりするんでしょうか？」

ライチ「ええ、期待は裏切らないわ。もちろんあるわよ〜」

ツバキ「デ、デスヨネー。ワータノシミダナー（棒）」

ラグナ「……んで？ 具体的には何をすりやいいんだ？ 悪いが肉弾戦なら魔道書持ちのオレとハザマに分があるから相手になんねえぞ？」

ハザマ「おやあ？何私と同類扱いしてくれちゃってるんですか？子犬ちゃんの模倣品なんかとは比べものにもならねえっての。結局私が一番強くてすごいんですねえ」ズズ

マコト「ハザマ大尉、ラグナくん…？戦いは何時の時代も数。つまり相手が本調子を出す前に手数で制す私にだって十分勝機はある。いや、私にしか勝機は無いね！」ゴゴ

ツバキ「マコト？ただ眼前の敵にしか目が向かない脳筋には一生勝利なんか訪れる事は無いわ。本当の接近戦、というものを教えてあげようかしら？」ドドド

ノエル「ノエルです。なんか分からないけど頑張ります」

ライチ「殺気立っている所悪いけれど、そんなに激しいものでは無いわ。ちよつとしたレクリエーション、とでもいったものかしら。ただの連想ゲームよ♪」

ラグナ「あ？連想ゲームつつつたらあの丸いといえぱ…って感じのあれか？」

マコト「なあんだ、つまんないの」

ツバキ「冷静になって考えてみれば、こんな狭い部屋で四人で乱闘なんて、常識的に



デデーン マコト アウトー

マコト「あ」

スパーン

マコト「非常に苦痛哉」

ツバキ「何やつてるのよマコト」

ライチ「…もう最初のお題いってもいいかしら？」

マコト「あ、すみませんもう大丈夫です」

ライチ「それじゃ最初のお題、『バナナといえば？』」

ハザマ「まあ最初ですしこんな感じでしょうかね。えー『バナナといえば甘い』」

ラグナ「意外と難しいなこれ：『甘いといったらチョコレート』！」

ノエル「え!?!え!?!これ、直観で良いんですね!?!えーと、えーと」

ライチ「あと五秒〜」

ノエル「うえ!?!あーあー、あー! 『チョコレートといえば茶色』」

マコト「ふふん、『茶色といえば勿論』この私マコト『ナナヤ』!!」

ツバキ 『マコトといたらリス』

マコト 「反応無し!?! (。ロ\)

ハザマ 「リスといえは…そうですね…：…なかなか良いものが思いつきませんね…まあでも先ほどのノエル嬢の待ち時間的にまだ猶予は…」

ライチ 「はい時間切れ」

ハザマ 「なんか短くないですかねえ!?!」

ライチ 「答える時間は私の独断と偏見で決めさせてもらっているわ」

ハザマ 「」

ラグナ 「こいつはひでえ」

ライチ 「答えられなかった人からお題の紙を引いてそこからまた再開ね」

ハザマ 「はあホントなんなんですか私のこの扱い…」ゴソゴソ

お題 『ラグナといえは?』

ハザマ 『『ラグナといえは』『ミ』』

マコト 「まさかの即答ww」



ラグナ「『ゴミといえばハザマ』」

ノエル「なんかすごい答え辛い空気なんですけど…え、えーと『ハザマといえば大尉』」

マコト「これなら簡単！『大尉といえば偉い』!!」

ツバキ「そうね…『偉いといえば帝』、間違いではないわ」

ハザマ「帝といえば、帝と云えば？自分じゃあたいたいして何でもできる訳じゃないのにやたらと我々部下の足りない所を一々言わなくてもいいところでペラペラくっちゃべる割にはたいして自分は世間の一般的な知識は頭に入って無えんだよ。前なんか部屋のトイレを改修するんで隣の私が仕事で使ってる部屋のトイレ使ってくださいって言ったら覗くんじやないの？とかぶつくさ言いながらも一般のトイレ使ったんだよ。ここまでは良いんだよここまででは。あいつ流さねえんだよ!!生まれてこの方自動洗浄しかなかったから終わったら水を流すというあの一般的な感覚が身に付いて無えんだよ!!自分の責任を水に流す前にまずは自分で用を足した後のそれを流すことを知れやああああ!!」

…はい次ラグナ君」

ラグナ「は!?えーと…あー…」

ライチ「はい時間切れ☆」

ラグナ「理不尽だ〜〜!!!」

〜しばらくして〜

一位：ツバキ 「カグツチマグロなどの高級海鮮を用いた弁当」  
ツバキ「あ、アワビおいしい…」モグモグ

二位：ハザマ 「北京ダックなどのカグツチの有名食品」  
ハザマ「以外と悪く無いですねえ」モツシャモツシャ

三位：ラグナ 「ただの幕の内弁当」  
ラグナ「まあ可もなく不可もなくか…あ、鮭うめえ」ムーシャムーシャ

四位：マコト 「日の丸弁当」  
マコト「ご飯の味がうまい!!」ガツガツ

最下位：ノエル 「日の丸の日の部分だけ弁当」

ノエル 「私が一体、何をしたっていうんだ…」

マコト 「かわいそうなノエルン、私がすこし分けてあげよう…」

ノエル 「ありがとうマコト〜」 ダバー

マコト 「はい日の丸の部分♪」

ノエル 「」

つづく

## 第十二話 マコト「悪意の塊だね! (迫真)」

—お昼時を過ぎ、夕オならばすでに惰眠を貪っているであろう時間帯。しかしこの五人にはそんなことをする余裕などなく、ただひたすら何時来るか分からない笑いの刺客達に緊迫した雰囲気を保っていた……そう、無駄に自ら動く事無くただ敵を迎え撃つかのごとく……

ラグナ「ちよつくら用足してくるわ」ガタ

マコト「ゆつくりブリブリしておいで♪」ヒラヒラ

ノエル「マコト、それ下品……」

ハザマ「あ、じゃあ私も行きますよ。今思い返せばこの企画始まってから一度もトイレに行つてませんのですね」

ツバキ「あ、じゃあ私も」

マコト「私もそろそろ膀胱がデンジャラスでクライシスかも……」ピョイン

ラグナ「絶対にクライシスはするなよ……放送できないからな」

ノエル「私はさつき行ってきたから別にいいかな」

ツバキ「じゃあノエルはそこでおとなしく待っててね？」

ノエル「は〜い☆」

ガラツ ピシヤン

ノエル「……………」チラツ

ノエル「…行つたかな?……………よし、そうときまれば細工細k…」

ガラツ

ツバキ「あ、そうそうノエル」

ノエル「きゃひゃい!」ビツクウ

ツバキ「ちよ、ノエル大丈夫!?尋常じゃない驚き様だけれど」

ノエル「だ、大丈夫っ! つ、つつツバキはどうしたの? やけに早いじゃない」  
ツバキ「え、ええ私はハンカチを忘れたから取りに…」  
ノエル「そ、そそそうなんだいい行行ってらっしゃい」  
ツバキ「？」

ガララ ピシヤン

ノエル「……あゝゝ心臓出てくるかと思つたゝ」ホッ

ノエル「……………」チラッ

ノエル「作業再開つと♪」ガサゴソ

ゝ男性用トイレ内ゝ

ラグナ「それにしても以外なんだよなゝ」ジヨオオオオオ

ハザマ「あ？何がだよ藪から棒に」シヤアアアア

ラグナ「帝……まあサヤの事だが、オレがまだシスターといた時にはお前がたまに言う愚痴の内容の様な事は無かつたんだがな……」ジョオオオオ

ハザマ「ハハハ、なんだそんな事かよ」シヤアアア

ラグナ「あ、テルミお前今」ジョオオオ

ハザマ「やべえやつちまった……」シヤアアア

### シーン

ラグナ「あれ？おかしいなデデーンならねえぞ」ジョオオ

ハザマ「もしかしたらトイレの中とかならセーフなのかも知れねえな」シヤアア

ラグナ「かもな、今の内にここで笑つとくか？」ジョー

ハザマ「読みが外れたら怖いからオレはいいわ」シヤア

ラグナ「だな、そろそろ戻るか」ピッピッ

ハザマ「そうだな、こんな所で長いしても意味無えしな」ピッピッ

ノエル「フンフンフフーン♪まずはマコトの机の中にく♪」

デデーン ハザマ アウトー

ノエル「あ、大尉アウトになってる。トイレで何があつたんだろ」とりあえず緑膿菌の写真をく

ガラッ

ノエル「うひゃあ!? ってあれ衛士の人? ハザマさんならトイレに行つて」

スパーン

ノエル「いったああ!?!」

ガラピシヤッ

ノエル「……………」

ノエル「…え!?!」



ガラツ

ラグナ「おい、戻ったぞ。つてお前何してんだ？」

ノエル「さつきハザマさんがアウトになったのになぜか私がアウトになったんですよ、おかしくないですか？ねえこれ絶対におかしいですよ？私笑ってないんですよ？何もしてないんですよ？………すみません何もしてないってのはウソです。でもやっぱり笑ってもないのにアウトになるのはおかしいですよねラグナさん？」ユサユサ  
ラグナ「お、おう一旦落ち着け。お前いま目に光が無いぞ？」

くその頃 女性トイレ内く

ツバキ「中は以外とキレイで安心したわ」

マコト「そうだね、ちゃんとウオシユレットとか付いてたし」  
マコト「でも、ひとつだけ気になるのが…」

『…………』

ツバキ「あそこの私達が来る前から使用中になつていたトイレね…」

マコト「気になるしちよつとノックしてみようか」テテツ

ツバキ「あ、ちよつとマコト、本当にお取込み中の人の人だったらどうするのよ」

マコト「その時はその時だよ。…すみませーん」コンコン

マコト&ツバキ「…………」

シーン

マコト「…なくんだ。誰もいないよ、ただの思い違いだつて…」

??? 「は、入ってまゝす……………」

マコト「ひゃあ!?! す、すみませんでしたー!」ダツ

ツバキ「あ、こらマコト! ちゃんと謝らないとダメでしょ!?!」ガツシ

マコト「結局誰なんだろう。声的に若い感じじゃなかったけど」

ガチャッ

イグニス「…」スタスタ

ツバキ「ふっww」マコト「ぶふっw」

デデン マコト ツバキ アウトー

ツバキ&マコト「……………」？」

ツバキ「私達、アウトになりましたよね？」

マコト「うん、確かに笑っちゃったよ…」

ツバキ「…ですよね」

ツバキ&マコト「……………?」

マコト「…あ、謝るの忘れてた!!」

ハザマ「あつちでも何かあったのでしょうか?」

ラグナ「俺たちみたいにやらかしたただけじゃないのか?」

ガラツ

ラグナ「ん?なんか図書館のやつらが二人?あいつらはトイレだぞ?」

スパーン

ラグナ「いってえ!」  
ハザマ「ちよつ!」

ガラツピシヤン

ハザマ「一体どうなってんだあ？ トイレでアウトになったら他の奴がアウトになるようになつていんのか？」

ラグナ「かもしれねえな。とりあえずあいつらが戻つて来てから詳しく聞いてみようぜ」

ガラツ

マコト「いやゝ聞いてよノエルン、さつきトイレに行つたらさゝ」  
ノエル「笑つちやつたけど何故かアウトにならなかつたんだよね」  
ツバキ「あら？ ノエル、なんで知っているのかしら」

ノエル「多分あそこの二人に聞いた方が分かりやすいと思うよ」  
ツバキ「二人？」

「お互いに情報交換中」

ツバキ「そんな事があつたんですか…」

ハザマ「こりやいよいよ何も信じれなくなってきましたね…」

マコト「ほんとにこんな事までしてアウトにしようとするとは…悪意の塊だね！」

ラグナ「ああ…」

マコト「悪意の塊だね！（迫真）」

デデーン ラグナ アウトー

ラグナ「なんでわざわざ二回言うんだよwwしかもドヤ顔でww」

スパーン

ハザマ「とにかく、今後トイレの中では絶対に笑わない事、これでいいでしょう」

マコト「さっすが緑膿菌、話が早い」

ハザマ「もう何も言わねえからな」

マコト「ちえっ、つまんないの」

ラグナ「おう…前から思ってたが、もう上司だとか部下とかいう概念が完全に無くなってるよな」

ハザマ「この企画が終わったら即行で減給だ」

マコト「やめてください、これ以上給料減らされたら本当に一日一本うまい棒の生活になっちゃいます」

ハザマ「分かっただら少しは上の人に対する気遣いというものを見せてください」

ラグナ「お前ら、楽しそうだな」

ハザマ「ええ、笑顔が絶えない楽しい職場ですよ？」

ラグナ「諜報部がそんなので良いのかよ……ま、話を戻すと結局のところトイレにいったら絶対に笑わない、これで良いんだろ？」

ツバキ「はい。それに仮に他の人がアウトになるとしても、アウトになる人の名前はそのままですからすぐにわかるとは思います……」

マコト「アウトになる人がだれか分からないからね。もし選択できるならトイレに籠るけど☆」

〽五分後〽

ガラッ

ハザマ「あん?」

ライチ「皆々。やっとなちゃんとしたお仕事よろ。」

マコト「お仕事? お仕事って何の?」

ライチ「もう、今のあなたたちは新人ウエイトレスでしょ?」

ラグナ「ああ、そういや俺たち今はウエイトレスだったな」

ノエル「完全に忘れてました!」

ツバキ(アラクネタイツ)「そ、そういうえば私こんな恰好ですが大丈夫なんでしょうか?」

ライチ「うくん…その恰好だとちよつと厳しいかもしれないから裏で調理担当になるわね」

ツバキ「わ、分かりました。」

マコト「まあ、何にしてもさ、言える事は一つだけだね」

五人「…不安だ…」



う  
う  
う  
う

## 第十三話 レリウス「私は……お前にぶっかけたいっ!!」

ライチ「今の時間帯なら人は少ないから、初めてのあなた達でもきつとできると思うわ♪」

ハザマ「まあ、確かに見る限りホントに人が少ない訳ですが……これで研修になるんですか?」

ライチ「大丈夫よ。えーと、それでやってもらう仕事の分担なのだけんど……」

くウエイトレスチーム ラグナ&ノエルく

ノエル「二人で一緒に頑張って行きましょうっ!ラグナさん!!」

ラグナ「よりによってオレがウエイトレスかよ……メンドくせえ……」

ノエル「ダメですよラグナさん、もつとしっかりしないと!!」

「裏で料理担当　マコト&ツバキ」

ツバキ「料理といつても、そこにあるレンジで温めたりサラダを適当に盛り付けるだけの簡単な作業なのよね…」

マコト「あれ？私達もしかしたら一番楽なんじゃないツバキ？」

ツバキ「そうね……クスツ…他の人達には悪いけど、私達は少し楽させてもらおうかしらね？」

マコト「お、ツバキ、早速注文が来たよ」

ツバキ「はいはい。えーと、抹茶フロートとクリームソーダね…ちよつと待っててね…」

「レンジ打ち担当　緑膿菌もといハザマ」

ライチ「いきなりレジ打ちは難しいかもしれないから、最初の内は私が隣に立って教えてあげるわ」

ハザマ「いえいえ、レジ打ちぐらいなら私一人でもできますから、他の人の方に行っただ方がよろしいのでは？特に火を使う料理担当の二人には誰かが近くにいた方が良くと思いますけど」

ライチ「あら？そう？本当に任せちゃって大丈夫かしら〜」

ハザマ「ええ、お任せください」

くまたウエイトレス班く

ラグナ「あ〜、客も少ねえしくつそ暇じゃねえか…」グデー

カランカラン

ラグナ「お、客来た」

ノエル「いらつしやいませ！何名様ですか？」ハキハキ

男「…二名で」

ノエル「はい！かしこまりました。こちらのテーブルになりまーす」

男「…ああ、ありがとう」

女「…」

ラグナ「あいつ…まずは喫煙席か禁煙席かどうか聞けよ………つーか曇りガラスでよく見えねえが、女性と男性か？」

女「急に呼び出して…何の用かしら？」

男「…すまない……………」

女「…ふう………昨日の夜にも言ったでしょ？これ以上、アナタとは一緒にいられない」

ラグナ「…ん？なんか揉め事か？」ソソツ

レリウス「……………っ!!違うんだ聞いてくれ、イグニス!!」

デデーン ラグナ アウトー

ラグナ「あいつらかよwwww」

スパーン

イグニス「私なんかじゃなく、あの一緒にいた奴の所に行けば良いじゃない…どうせ遊びだったんでしょ？私のことなんて。」

レリウス「ち、違う！昨日の夜のこととは誤解だっ!!急にあの女が言い寄ってきて…！それで…そのっ…」

ドンッ

ノエル「お待たせしましたあ!!こちら、抹茶フロートとクリームソーダになりまあす!!」ドーン

デデン ラグナ アウトー

ラグナ「あのバカ野郎w空気ぶち壊しやがって…!」

スパーン

ラグナ「おい、バカ。ちよつと来い」チヨイチヨイ

ノエル「?。何ですか?あ、後私バカじゃありません」

ラグナ「あのなあ、お前少し空気を読め。ああいう時はもう少し気まずそうに持つて行くのが基本だろうが」

ノエル「そ、そういうものですか?」

ラグナ「ああ、そうだ。ほら、もう一回行って来い」

ノエル「は、はい!」

ノエル「お、お待たせ。こちら、抹茶フロートt…」

イグニス「あら……? そういえばあなた、最近入った新人研修生の子よね？」

ノエル「あ、は、はい……」

レリウス「……………」

ノエル「も、もしかして、デート中だったりします?」

イグニス「…いいえ。この人とは、ただの知り合いよ」

外野1「ねえ、今の聞こえた?」

外野2「聞こえた聞こえたww」

外野3「あの人、振られちゃったねー」

ラグナ（なんだ? 今度は後ろの方が騒がしいな…）チラツ

プラチナ||ザ||トリニティ（次からルナ）「二股とか、マジありえないんですけどww」  
レイチエル「きつとこの後に『オレが愛しているのはお前だけ』とかくっさいセリ  
フを吐くでしょうね」

ニルヴァーナ「二股してる時点で説得力皆無なのにね」



デデーン ラグナ アウトー

ラグナ「何してんだあいっらwwつかなんてさりげなくガールズトークにアークエネミー混じってんだwww」

スパーン

レリウス「……イグニス。誤解しているであろうから言うが、私はお前の事を本当に愛して……」

イグニス「私は貴方のお人形じゃないの。……悪いけど恋人ごっこはもうしたくないの」

ルナ「いや人形だろwww」

デデーン ラグナ アウトー

ラグナ「あいつなんで一々含み笑い話すんだwwこつちも釣られちまうじゃねえかw」

スパーン

レイチエル「それにしても、人形ねえ……」

ニルヴァーナ「いい趣味してるわー。あの変態仮面」

ルナ「保存用、観賞用、布教用とかあったりしてwww」

レイチエル「後あれね、実用用」

ニルヴァーナ「実用用?……あーぶっかけ用かー」

デーン ラグナ アウトー

ラグナ「くそwwこんなのでwww」

スパーン

ルナ「ぶっかけ!?あの変態仮面、イグニスさんにぶっかけたの!?ぶっかけとかマジド  
ン引きなんですけど……」

ラグナ（すげえこのうるせえチビ二名とガラクターっ追いついてえ……）

ノエル「イグニスさん……ぶっかけられたんだ……」

デーン ラグナ アウトー

ラグナ「拾うんじゃないわバカノエル!!」

イグニス「そういうこと。だから、これからはあの人にぶっかけて頂戴」

ラグナ「なんでイグニスの奴もぶっかけに反応してんだ……」

レリウス「……つま、待ってくれ、イグニス!私は……私は…………お前にぶっかけた

いっ!!!」

デデー ラグナ アウトー

ラグナ「なんでそうなるんだよwwww」

スパーン

イグニス「…あなた／＼／」トウソク

ラグナ「え!?!何?あれで良いのか?イグニスさんあなたの思う人はそんなので良いのか?」

レイチエル「これはイグニスさん、翌朝はカピカピね」

ルナ「顔射かー。私あんまり好きじゃないなー」

ニルヴァーナ「あなたの髪の毛長いもんね」

ノエル「え、そういうのって後の処理とか大変なんですか?」

ルナ「すぐに洗い落とさないと大惨事になっちゃうよ」

ラグナ（何さらつと会話に入ってたあのバカ…）

カランカローン

女2「レリウス様!!」

ラグナ「え…まだ続くのかこの茶番」

イグニス「あら?…あなたは確か…」

ココノエ「またこの女と一緒にいる…!」

レリウス「コ、ココノエ…!!どうしてここに…」

くかくかくしかじか

ルナ「ふくん、なるほどね。そんな事情が…」

レイチエル「ココノエっていう人も苦労していたのね…」

ラグナ（なんで外野共が会話に加わってんだよ…）

イグニス「ココノエさん、だったかしら…。悪いけど、私のレリウスは渡さない」  
ココノエ「いいえ!レリウス様にぶっかけてもらうのは私だ!」

デデーン ラグナ アウトー

ラグナ「何で結局そうなるんだよwww」

スパーン

ルナ「あのココノエって人、ぶっかけの意味知ってんのwww?」

ラグナ（こいつらホントにどっかいつてくれよ）

レリウス「……………ココノエには悪いが、私はイグニスを選ぶ」

ココノエ「えっ…!？」

イグニス「あなた…／＼」トウトウンク

レリウス「ココノエ…本当にすまない……」

ココノエ「こ、こんな結末……私は認めないっ！認めないぞ!!」ダッ

カランカラン

レリウス「さあ、行こうか、イグニス」

イグニス「ええ……あなた……」

カランカラン

ラグナ「マジでなんだったんだ……ケツ痛え……」

ノエル「……あ、あの人達ジュース全く飲んでない。……もらっちゃおう♪」

つづく

## 第十四話 ラグナ「：ウソやん」

（それから数十分後）

ライチ「はい！それじゃ実際の体験研修は終わりよ、皆集まってくれるかしら？」

ラグナ「最初の変態仮面野郎の事を除けばマジで普通の研修でビビったんだが……」

ハザマ「オレもだわ。何か来ても良いように構えてたんですが、杞憂でしたね」

マコト「レジのハザマ大尉が構えてたら店に来た人怖くて逃げちやつた人いるんじゃないの？あ、私ちよつとトイレ行ってくる」

ハザマ「いえいえ、アウトにならないようにですが常に営業スマイルは欠かしていませんでしたよ？」

ノエル「へえ……どんな感じだったんですか？」

ハザマ「え？今やれと言いますか………ニコオ（暗黒微笑）」

ツバキ「衛士さん、こいつです」

ラグナ「お前らが衛士だろうが。それにしても、こりやタケミカズチも全裸で逃げ出すレベルだな」

ハザマ「ちよつと待てやそれどういう意味だ？」

ラグナ「もっと分かりやすく言ってやると緑膿菌が更に腐敗したような顔だったな」

ハザマ「あゝ？」

ラグナ「うん？」

ライチ「はいはい、元気が良いのはいいけど、今は少し抑えてね？」

ハザマ「…ちっ。後でぶっ潰してやるから覚悟しとけや」

ラグナ「その言葉そっくりそのままリボンでも付けて送料込でお返しするわ」

マコト「少しトイレ行ってる間に何があったし」

ツバキ「ええ、ちよつといざこざがあったね」

聞いてくれるかしら？」

ライチ「あ、言い忘れてる事があったわ。そこで睨み合ってる二人もこつち向いて話



ラグナ「あ？」 ハザマ「お？」

ライチ「…か、顔は元に戻してくれないかしら……。えーと、これは最初に言っておくべきだったのだけど、最もアウトが多かった人には罰ゲームとして何かしらのペナルティがあるらしいの。」

全員「……………は？」

ノエル「ええええ!?そ、そんなの聞いてないですよ!?!」

ライチ「本当にこっち側のミスだわ。本当にごめんなさいね…」

マコト「それは良いよ。それよりその罰ゲームの内容だよ!何?トイレ掃除とか?」

ツバキ「減給とか?…あ、それだと無職のラグナ!!ザ!!ブラッドエツジがノーリスクだわ」

ラグナ「うるせえな……まあ無職だけだよ…」

ライチ「そんな生易しいものでわ無いわ。何と最もアウトが多かった人は…」

ツバキ「人は?」

ライチ『『死ぬまで統制機構で血反吐を吐くほど働く』という内容らしいわ』

ラグナ「いやちよつと待てや。そもそもオレは図書館に入つて無いんだが……………」

ライチ「何でも強制的に帝の『絶対的ななんか』によって就職させられるらしいわ」

ツバキ「絶対的ななんかって何ですか!？」

ライチ「後、今ダントツでアウトが多いのはラグナ、あなたよ」

ラグナ「…ウソやん」

ツバキ「ふっw」

デデーン ツバキ アウトー

ツバキ「き、急に口調を変えないでくださいww」

スパーン

ノエル「確かにしよっちゆう色んなところで笑ってましたもんね」

マコト「何も無い所で思い出したように笑ってたりしてたからそれもカウントされて

たらかなりの数だよあの人」

ハザマ「ちなみに私達は何回かといった情報は無いんですか?」

ライチ「ええ、もちろんあるわ。それじゃアウトの数が今の所低い人から発表するわ

ね…:まず最も少ない人はハザマ大尉で、58回ね」

ハザマ「一番少ないといわれてもこれですか…:これは一位の人が恐ろしいです

ねえ」ニヤニヤ

マコト「えー、緑膿k大尉絶対もつとアウトの数多いって〜」

ハザマ「ナナヤ少尉、根も葉もない言いがかりはやめてくれませんかねえ?」

マコト「根拠はあるよ。大尉ってよく何か笑いそうな事があつたらよく帽子を深くかぶり直して顔隠すようにするじゃん。その時肩がすごい震えてるの見たもん」

ハザマ「寒いからちよつと身体が震えただけですよ」

マコト「うゝゝ…納得いかなゝい」

ハザマ「話を戻して、次にアウトが多い可哀そうな人は誰なんです?」

ラグナ「自分が一番少なかったからって調子乗りやがって…」

ライチ「次はツバキちゃんで、63回よ」

ツバキ「わ、私ですか…」

マコト「まあゝ、これは順当かな」

ノエル「ツバキすごい笑うの耐えてたもんね…顔真つ赤ですごい可愛かったもん」

ツバキ「ちよつノエル、からかわないですよ／／」

ノエル「からかつて無いよ? 私本当にツバキは可愛いなって思ってるよ?」

マコト「素直になろうや、ツバキさん、あなたは可愛いんだよ」

ツバキ「もう! マコトまで: / /」

ハザマ「はいそこ良い感じにならない。すみませんねえ、いちいち話がそれてしまつて」

ライチ「いいえ、あの子達本当に仲が良いから、見てるこつちも楽しくなつてしまふ

わ

ラグナ「何か母親臭え台詞だな」

ライチ「あー、私今すごいアペラエルのモノマネしたい気分なのよねー。ちよーつとラグナ!!ザ!!ブラッドエツジ見てもらえないかしら? 自信あるんだけど」

ラグナ「すみません口が滑りました」

ライチ「全く……三位と二位は一気にいくわね。三位はマコトちゃんの79回、二位のノエルちゃんは93回よ」

ノエル「ええ!? 私ってそんなにアウトになつてましたか!?!」

マコト「あのアウト製造ボタンがかなり差をつけたのかもしれないね!」

ノエル「あれはマコトのせいでしょ!!」

ハザマ「まあそして……」チラッ

ラグナ「あ? んだよ」

ツバキ「そのの更に上に行く人が一人……」

ラグナ「うるせえよお前ら! 言うんならさっさと発表してくれよ」

ライチ「一位のラグナ、112回よ」

ラグナ「は?」

ライチ「112回よ」

ラグナ「悪い。よく聞こえなかったわ、もう一回」

ライチ「122回よ」

デーン ハザマ アウトー

ハザマ「さりげなく増やしやがったww」

スパーン

ラグナ「ウソ：私のアウト、多すぎ？」

ノエル「すごいですねラグナさん。100回超えていますよ！」

ラグナ「いや全然嬉しかねえよ」

ライチ「まあさっきの研修であなた達とても頑張ってたし、しばらくは研修室でしっかりと休息を取れば良いと思うわ。また何かあったら伝えに行くから、それまでの間だけだ」

ツバキ「分かりました。それまではゆっくりとさせてもらいます」ペコリ

マコト「ゆっくりできれば良いんだけどね」

（廊下）

ノエル「それにしてもラグナさんすごいアウトの数ですね……身体大丈夫ですか？」  
ラグナ「分かんねえ……だが今は何としてもこのアウトの回数一位というのを何とかして『死ぬまで図書館で働く』なんていうのを防がねえとな」

ハザマ「『血反吐を吐くまで』が抜けてるぜ子犬ちゃん」

ラグナ「んな細けえ事あどうでも良いんだよ！オレは図書館で働くなんてのは死んでもゴメンだ!!」

ツバキ「笑顔の絶えない『楽しい』職場ですよ？」ニコオ

ラグナ「月の給料が遠足のおやつ程度しかない職場のどこに笑顔が生まれるっただよ!?!仮に生まれたとしてもそれは笑顔という名の別の何かだ!」

ハザマ「ごちやごちやうっせえよ、ま、このままじゃ到底社畜入り不可避だけどな」  
ラグナ「ザケンナ、こちとらまだ希望がある」

ガラッ

（新人研修室）

マコト「……」ペラッ

ツバキ「マコト、その北〇の拳ってそんなに魅入るほど面白いの？」  
マコト「なんか見てたらハマっちゃってさ」

ラグナ「なあどうする？また引出し調べるか？もしかしたら何か変わってたりしてるんじゃないか？」

ハザマ「そうやって自ら死に行くから、アウト一位になるんだよ学習しろよバカ」  
ノエル「あ、そうだ。ラグナさん、ハザマ大尉。前あつたDVD何故か私の机の上にありますから観ませんか？暇つぶしになると思うし。マコトとツバキも良いでしょ？」

ラグナ「おう、頼むわ」 ツバキ「ええ、構わないわ」

ノエル以外の四人「……………前の？……………あ」  
マコト「ノ、ノエルン！ちよつと待ってそれは……………」  
ノエル「あ、始まるよ」

ウィーン

ハザマ「手遅れだったか……………」

へ~~~~♪

ラグナ「何か爽快な感じのBGMだな」

題名『統制機構の衛士100人に聞いてみた!!この五人で誰が一番アウトになってほしい!?!』

全員「!?!」

つづく



## 第十五話 ノエル「あ、ぶっかけ大佐だ」

ラグナ「何だろうな、何かすごくこの数秒の間が長く感じるんだがよ…」

ツバキ「そうですね…。まるで私達が某小説サイトの主人公で筆者がろくに設定も練らず、挙句の果てにログインパスワードを忘れて8ケタのパスワードをひたすらに試していたらいつのまにか繋がってたが結局疲れて更に時間を延ばされたような気分です」

ハザマ「何訳の分からない事言ってるんですか。それよりあれどうするんですか」ユビサシ

DVDプレイヤー「ウィーン」へぶちかましてやるぜ

マコト「と、とどりあえずこれは一旦一時停止つと…。ふう、リモコンに変な仕掛けとか無くて良かった」

ピッ シューン

マコト「え、えっ!? ちよ、ちよっと今どつか別の所が作動しなかった!」

ラグナ「いや、お前今どこのボタンを押した?」

マコト「そりゃ一時停止したんだから一時停止ボタンでしょ」

ラグナ「そうか…？ どういう仕組みかは分からんがそれに連動してこの部屋のエアコンが一時停止したぞ」

マコト「うえっ!? マジで!? …… ホントだ…。 …… …… ん? よく見たら一時停止の下にE/D停止って書いてある…」

ノエル「…」

ハザマ「はあ…全く一々手間のかかった面倒な事をしてくれますねえ、あの紫もやしは」

ツバキ「他には何か変な文字が書かれているボタンは無いかしら?」

マコト「そうだねえ…：うわっ何語?」

ノエル「…」

ツバキ「あ、ちょっと見せてくれないマコト、もしかしたら分かるかもしれないわ」

マコト「ほい」

ツバキ「うくん…これはもしかしたらスワヒリ語の類で書かれているのかも知れないわね『ムバンガ』と書かれているわ」

ラグナ「へえ、とうかそのムバンガってどういう意味なんだ?」

ツバキ「それは私もよく分からないわ。そこまで熱心に語学を学んでいた訳ではない

し……」

マコト「まあとりあえず触らぬ袖に祟り無しっていうし、そのままにしておこ。エアコン切れたから寒くなるけど……」

ラグナ「つーか袖じゃなくて神だろ。袖に祟りがあつてたまるか」

マコト「あれっ？ そうだっけ。あはは、私とした事が失敗しっp……」

デデーン マコト アウトー

マコト「あつしまった」

スパーン

マコト「うう……ラグナさんにハメラれちゃったよ私……もうお嫁に行けない……よよよ……」

ラグナ「誤解を招くような言い方をするんじゃないやねえ。オレが指摘しなくとも他の三人が訂正入れてるだろ」

マコト「それもそだね、あーあ、DVD見れないと分かったと勝手に暇になつっちゃつたな……。……！ ノエルン、私のしつぽ触りっこする？」

ノエル「…」

マコト「ん？ノエルン？」

ノエル「…」

ラグナ「さつきからどうしたんだ？何も言わねえし微動だにしないが」

マコト「もおく、ノエルン、そういった遊びはウケないぞ」トンツ

ノエル「…」 グラッ

ドサッ

マコト「…え？」

ラグナ「ノエル！」 ツバキ「ノエル!!」

~~~~~

ハザマ「脈も正常、瞳孔も問題ないですね。ですが…」

ガシッ

マコト「ノエル!!しっかりと、目を開けて!!ああいや、目は開いてるわ…」

ハザマ「ノエル少尉は、いつ頃からこんな感じでしたか？」
マコト「え？うーんと、…どうだったかなあ」ポイ

ゴンツ

ノエル「…怒」

ラグナ「そうだな、DVDプレイヤー点けたのはこいつだし、間違いなくこいつは数分前までは元氣そのものだったな」

ツバキ「それでマコトが一時停止ボタンでDVDプレイヤーを止めて、それから…：それから？」

ハザマ「さつきから気になっていた事があるんですよねえ」

ラグナ「何が？」

ハザマ「そのリモコンにE/Dボタンって書いてあるじゃないですか」

ラグナ「え、何お前そつからボタンの下に書いてある字読めんの？マサイ族かよ、ヤバいな、そして死ぬ」

ハザマ「語彙力中学生かよ、つーかさつきナナヤ少尉が言ってただろうがIQも中学

生レベルかよ……んんっではなく……そこに書いてあるのってもしかして」

ハザマ「(エ)アコン、(ノ)エル、(D)VDじゃないですか？／はスラツシユではな
く」

一同「……………」

マコト「……↑まじまじと見つめる

リモコン「『エノD』

ツバキ「……………ぷ」マコト「あはは、もう心配して損した〜」

デーン マコト ツバキ アウトー

スパーン

ラグナ「そうと分かったらさっさと再生再生つと」ピッ

エアコン「ウイーンガー

ノエル「……あれ、何かこの部屋前より寒くないですか？あとなんか首が痛いです、何

これ、むちうち？」首さすり

マコト「……………はああ、良かったいつものノエルンだよ〜」

ノエル「いつものって…私はそんな急に変わったりしないよ…でもなんかすごいマコトに怒りを感じるのはなんでだろう？」

マコト「キノセイダヨー」

ツバキ「念のため、DVDは取っておいて…つと。よしこれで大丈夫ね」

ノエル「あれ？そのDVD見ないの？」

ラグナ「いや、見るからに怪しいだろ。こういうのは初めから見ないのが一番だ。触らぬ神に祟りなしだ」

くそれから30分後く

マコト「いいかげん本読むのにも飽きちゃったね」ペラツ…

ラグナ「やっぱ引き出しいつとくか」

ハザマ「だから止めとけて、アウトを増やすだけの罠しかないぞ」

ノエル「え、今までたぶん皆も作者も忘れてると思うけどこれ撮影だし、そういうたのは番組的に『おいしくない』？ってやつなんじゃないですか？」

ハザマ「そんなの私は知った事じゃありませんよ。寧ろこの番組そのものを今すぐに

でもぶち壊してお蔵入りにしてやりたいくらいですよ」

ガラッ

レリウス大佐「残念だがそれは不可能な考えだ」

ノエル「あ、ぶっかけ大佐だ」

レリウス大佐「その呼び名はやめろ」

ハザマ「というかどういふ事ですか？お話を聞かせてもらえますか？エロウス大佐？」

エロウス大佐「その呼び名もやめろ。…実は先程な…」

…ついで先程 帝の部屋へ

帝「番組の伸びはどうじゃ？」

レリウス大佐「上々ではないかと。このまま変わらず順調に行けば、予算の一部を賄えるようになるでしょう。ですがそれに至るのは難しいかと」

帝「難しい、とはどういう事じゃ？手短に述べよ。余は今忙しい」

レリウス大佐「(スマシス「スマッシュシスターズ」やつてるだけじゃねえか) はい、というのも参加者の一人であるテルミがあまり積極的ではなくこのままいくと視聴率

その他諸々が悪くなる恐れがございます」

帝「テルミがのう……あ、そうだじゃあこうしよう」

レリウス大佐「絶対建設的な案じゃねえよ、絶対」何か良い案でも?」

帝「余の独断と偏見で一番面白く無かった奴は爆破じゃ。アウトの数関係なくな」

~~~~~

レリウス大佐「…と、いう訳だ」

ハザマ「ふっざっけんな…」ワナワナ

ラグナ「このままいくと確実にハザマ、てめえが爆破じゃね?」

レリウス大佐「話は以上だ」スタスタ

マコト「またねーぶっかけ大佐」

レリウス大佐「はっは…この笑顔が消えた瞬間死ぬと思え」

マコト「ひっごめんさい!!」

つ  
づ  
く

## 第十六話 レイチエル「もがもごお……」

レリウス「それともう一つ」

ラグナ「まだなんかあんのか、帰れ」 ノエル「そーだそーだ」

レリウス「そう急ぐ必要もあるまい、それに私がこうしている間は貴様らに刺客が来る事は無いのだぞ？」

ノエル「あ、バームクーヘン食べます？」

レリウス「理解が早いのは良いことだ。………貴様らに伝えるべきことだが………良い方と悪い方、どちらからが好みかな？」

ツバキ「私はどちらでも………他の皆は？」

ハザマ「私は良くない方からお願いますよ。良い方聞いた方に悪い事聞いちゃったら、シヨックから立ち直れそうにないので」

ラグナ「どのメンタルで言ってるんだか……オレも悪い方先に頼むわ」

マコト「むしろどっちも言わない方針で！」

ノエル「ほうしんってなんですか？人の名前？」

ラグナ「アホ二匹はほつといて、悪い方からで」

レリウス「良かろう、では良くない方……………」

五人「……………」

レリウス「これからのこの企画は『笑ってはいけない』、から『驚いてもいけないし笑ってもいけない』に変更となる」ドン★

五人「…は？……………はあああ!?」

レリウス「今のはカウント外だが、次からこういうのもアウト対象となるから気を付けたまえよ?」

ラグナ「なんでまたそんな事で俺らの尻が酷使されなきゃならねえんだよ!」

レリウス「帝の勅命ではなく、スタツフの提案だ」

ラグナ「これ終わったらそいつ張り倒す…」

ハザマ「で? 私達にとって良いことは?」

レリウス「貴様らにとって良い事、それは……」

五人「それは……?」

レリウス「この企画自体が余すところ残り半分を切ったという事だ」

五人「F O O →——」

ラグナ「やっとこのふざけた企画ともおさらばできるのか……」

ツバキ「短いようで長かった……そんな気がします」

ハザマ「いざ終わると思うと、なんだか感慨深いですねえ……」

マコト「何か私このまま永遠にこの企画自体が終わらないんじゃないかって思ってたよ……でもでも、何か終るって分かった瞬間になんか元氣出てきた!!」

ノエル「あれ?でも私この企画終わったらその後全く仕事入ってない?これが終わったら私どうなるの?」

レリウス「私としても大変めでたい、この帝のイカれた我儘でどれほどの被害が出た

か……」

ラグナ「お前もそっちはそっちでそれなりに苦労してやがったんだな……」

ノエル「今の内にここのお菓子全部食べといた方が良いのかな……」

ツバキ「それぐらい今度私が出てあげるから、その淀んだ目はやめなさい……」

レリウス「私としてもこの歓びを形にしたくてね、この企画をこうしてなんだかんだあつても続けてきてくれた君たちに何か今すぐにもお礼がしたいんだ」

ハザマ「ちよつとw、どうしたんですか？レリウス大佐？らしくないですよ」

レリウス「……そこでだ」指パッチン

ガラガラガラー

ラグナ「え？」

レリウス「この大きいつづらと小さいつづら、どちらか好きな方を選んでくれ、遠慮はいらん」

ツバキ「……え？」

マコト「待って……いま私頭の中で今起こっている状況が理解できてない……まあいつもの事だけど今は殊更に混乱してるよ……！」

ノエル「なんかお母さんに昔読んでもらった舌切り雀みたいな展開ですね！……あれ？おじいさん結局どのつづら持って行ったんでしたっけ？両方？」

ラグナ「んな欲張りな事したらじいさん蛇やカエルどころか魑魅魍魎貰ってるわ……」  
ハザマ「まあなんにせよレリウス大佐、すみませんがこの様なもの、私達にはとても受け取れません」

レリウス「む？……そうか………では」

五人「……ほっ」

レリウス「では謙虚な貴様らにはこの二つともを与えよう」

デーン 全員 アウトー

ラグナ「畜生！金の斧銀の斧シテムかよ!!」スパーン

ツバキ「まあ、予想はしてたんですけどね………いったあ!？」スパーン

レリウス「では、私と帝からのプレゼントをありがたく受け取ってくれたまえ」

ガラガラ ピシヤツ

ラグナ「くっそ、とんでもない粗大ゴミ貰っちゃったよ…」

ノエル「あ、確かにすっごい可愛い丸文字で名前書いてますよ?」

ラグナ「あ? そりゃあ帝も一応女なんだからそんな字書くだろ」

ノエル「何言ってるんですか、レリウス大佐のですよ」

デデーン ラグナ ハザマ アウト

ラグナ「あいつホントにどんな奴か読めないんだがww」スパーン

くおおよそ一分後

ラグナ「…で、だ」チラツ

ハザマ「何で私を見るんですか」

ラグナ「いやさ、こういう中身が分からないものを開けてリアクションを取るのはお

前だと思っ d ハザマ「ねーよ」



ラグナ「おいおい男だろー？たまには良いところ見せてくれよ」  
ハザマ「うるせえよ」

ノエル「なんか甘い匂いが大きい方からするんで開けちやいますね」フラッ  
ラグナ&ハザマ「あっおい!!」

ノエル「おいかけて〜逃げるフリを〜して♪」

カパッ

レイチエル「もがごもごお…」

ノエル「……………」

ソッ

ノエル「…小さい方行きましようか」

ラグナ「何があつた!?!」

くくくしばらくして

ラグナ「……なんでお前がここにいんの？」

レイチエル「ぶふいなふいふもんへ…わふあふいのふおうどうをふあにやふあにひらへるひふようは無いわ（無粋な質問ね…私の行動をあなたに知らせる必要は無いわ）」ポロポロ

ラグナ「口にマカロン詰め込んで話すなよきたねえなあ…何言ってるかわかんねえよ」

レイチエル「…ふあつて（待って）……………んんっ…ふう…」

ノエル「大丈夫ですか？お茶いります？」

レイチエル「いらないわ。私のこの喉を潤すのに、そんな安物はふさわしくないわ」  
ラグナ「うるせえぞ、ウルトラソール」

レイチエル「なっ／＼／＼…あっ…あれは無理やりで…／＼／＼」  
 マコト「そのわりにはノリノリだったじゃん、もしかしてああいうノリ好きなんじゃないの〜?」

レイチエル「お黙りなさい、あなたみたいな下賤な輩と一緒にしないで。……まあこれから同じになるのだけれど……」

ツバキ「どういふことかしら?」

レイチエル「私も新しくこの企画に刺客ではなくされる側として参戦する事になったから、せいぜい頑張る事ね」

ラグナ「あ?」ハザマ「は?」ツバキ「え?」マコト「うん?」ノエル「?」

五人「はあああああ!」

レイチエル「きや!」

デデーン 全員 アウト

スパーン

ラグナ「話を戻そうか…なんでお前が?」

レイチエル「それh… ラグナ「待った…俺が当ててやるよ、どうせ『帝の気まぐれ』、  
 だろ?」

レイチェル「あなた…この手の企画でやっていけるんじゃない？」  
ラグナ「嬉しくねえな」

レイチェル「というか、あのつづらの方はどうするのかしら？」

マコト「あの中には何が入ってるの？」

レイチェル「内容は分からないけれど、DVDが入っていたのは覚えているわ」

ラグナ「ええ…また？」

## 第十七話　ゴリバング「ウホホン W W ウホホン W W」

ラグナ「またDVDか？まだ前の方の奴すら見てないんだが……」

ノエル「それはそうと、小さい箱の方にまだ何か入っていますよ？」

ハザマ「どれどれ……ほうほう……あく、成程……」

ラグナ「いや、声に出して読めよ。こっちが分かんねえだろうが」

ハザマ「読みたい人だけ回して見れば良いでしょうに、説明は面倒、というより直に見てもらった方が良いわこれ……ほら」

ラグナ「…………あく、そういう事か……色々大変だな、次マコト読むか？」

マコト「私は良いや、取説とかそういうのは読まずに進めていくタイプだから」フンス

ツバキ「……どちらかというと、マコトは新しく買ったものでもなんでもすぐほったらかしにしたりしてるからいつのまにか無くなってるとしよ……探すの手伝うの大変だったんだから」

マコト&ノエル「反省してます」

ラグナ「じゃあツバキ、ほらよ」 ツバキ「どうも」

ツバキ「……………? えっ? …うん、なるほど、こういった感じなのね…」

ツバキ「はい、レイチエルさん」レイチエル「ん」

ノエル「…え!? なんで!？」

ツバキ「あ、えと…ノエルには少し分からないものかもしれない、から?」レイチエル「届かない…」

ノエル「分かるよ!! これでも前にお父さんに『お前は我が家のパンドラの箱だ』って言われてたからね!」ドヤア

ツバキ「絶対それ褒められてないわ…」レイチエル「腕を下しなさい、届かないわ」ラグナ「あ、じゃあよお、それ声に出して読んでみてくれよ、分かるならさ」

ツバキ「え!？」

ノエル「バカにしないでください!! えーと…どれどれ?」レイチエル「見えないんだけど」

ラグナ&ハザマ「…………ふっ」

ノエル「私と左隣の人は仲良くアウトになります!!」

レイチエル「えっ」

デデーン レイチエル ノエル アウトー

デデーン ラグナ ハザマ アウトー

レイチエル「……………」スパーン

スパーン

レイチエル「いつ!?!」

ラグナ「あく…ノエルのアウト宣言とウサギが驚いた分で二回カウントされちゃったんだな」スパーン

レイチエル「……………次やったら頭からいくわよ…」

ノエル「いくつてどういう!?!っていうかホントにすみませんでしたあ!!」ペコペコ

ノエル「レ、レイチエルさん!、目!!目が怖いです!マジですよ!?!」

ハザマ「権謀術数とかそういうのは苦手なんです、こういったのは得意なんですよ

ねえ……くくつ」

レイチエル「……………ラグナ、あなたこんな事して後でどうなるか分かっているんでしようね?……………」

ラグナ「いや、まあ、ノエルの左隣を選んだ事を恨むんだな」

マコト「まあ?ここの過酷な状況に少しでも慣れるようになっていう洗礼かなんかだと思えば、ね?レイチエルさん」

ハザマ「あのクソ吸血鬼の驚いた顔も拝めたし、このままDVD行きますかねえ」

ウィーン

『カルル君の日常』

ラグナ「カルルっていうとあのプロレス好きな姉に連れられてたメガネのガキか」

マコト「たぶんホントはプロレスは好きではないと思うけどね…あれは破壊力やばかったからねえ」



ツバキ「またそれ関連でカルル君とあの人ぎよ…カルル君のお姉さんが出たら耐えられる気がしないわ…」

ハザマ「やめてくださいよ…あなたの勘はよくあたるんですから」

『カルル君、動物園に行く』

ラグナ「プロレス関連では無い…：がまだ油断はできないな」ゲンドウフォーム

ハザマ「タイトルだけで釣り、つて言うのも十分ありえますからねえ…：ここはまだ様子見と言ったところですかね」ゲンドウフォーム

レイチエル「たかがDVDで何をあそこまで熱心になれるのかしらね、度し難いわ」  
マコト「あはは…：ラグナさんはアウトの数的に一番やばいらしいですし、ハザマさんは帝による個人的な理由でやばいらしいですからね。なんとかして現状を打破したいんでしよう」

カルル(クソガキver)『わく、キリンさんだ〜！あつ、あつちにはゾウさんもいるく、うわくすつご〜い!!』

ノエル「カルル君の小学生くらいの時ですかね…：か、可愛い…：」ズイツ  
マコト「お部屋に飾りたいくらい若々しさが溢れ出てるよお…：」ズイツ

ラグナ「女二人がガキに反応してるがお前は良いのか？」  
ツバキ「え!?!、いや、私は別に…」

カルル『あとこつちには……ゴリラさん!』  
ツバキ「というか二人とも、画面に近づきすぎ…」

ゴリバング『ウツホホウホホイwwwウツホホウホホイwww』 シュツシュツ  
マコト&ノエル「うおえっ」

デデーン 全員 アウトー

ノエル「キグルミから漂うあの暑苦しさwww」 スパーン  
ラグナ「なんで上の方のキグルミはあるのに下は裸なんだよw、これじゃバレバレだ

ろwww」スパーン

レイチエル「この私が二度までも……落ち着きなさい、レイチエル。アルカード……あなたは吸血鬼、冷酷な吸血鬼こんな下賤な事など全くいつたあ!?! 集中力切れた!!」スパーン

マコト「うわあ……こんな焦ってるレイチエルさん見るの初めてだよお……」

イグニス『カルル君、本当にごめんなさいね……』

ハザマ「次はイグニスかよ……」

イグニス『お父さんがいてくれたら、ネ○ミーランドとか行つて色んなアトラクションとか乗れたかもしれないのに……』

ラグナ「何やら複雑な家庭環境な感じだな」

カルル『ううん、僕ね、動物いっぱい見れて、楽しいよ!』

イグニス『お父さんが事業に失敗しなかつたら、こんなことにはならなかつたのに……』

うううう……』ポロポロ

カルル『大丈夫だよ、お母さん、元氣出して。……………あつあそこにいる、ほら！  
あの白と黒の汚れた大きな動物は何!?』

イグニス『……………あんた!!』

デデーン ハザマ ツバキ ラグナ アウトー

ハザマ「何してんですかあの人はwww」スパーン

『カルル君、生まれる』

ラグナ「いきなり時代遡つたな……………」

ニルヴァーナ『ぎゅーん、バーン、チガーン、ドガーン』

ノエル「あの大きな人形がミニカーで遊んでる…」

ツバキ「これは笑うより先にあまりの衝撃的映像に脳が付いていけなかったようだわ…」

ラグナ「多分それ後になってぶり返すぞ」

レリウス『おお、エイダ。今ちよつと良いか?』

ニルヴァーナ『あ、何? パパ』

レリウス『もう直なあ、お前に妹か弟ができるぞ』

ニルヴァーナ『えく!? ホントに!? 嬉しいくっ!!』

レリウス『もうお前も立派はお姉さんになる訳だから、しつかりしなきやダメだぞ』

ニルヴァーナ『分かったよパパ!』

レリウス『おお、そうか期待しているぞ』

ニルヴァーナ『あ、そうだパパ。赤ちゃんってどうやったらできるの?』

レリウス『ああ、それはな…』ニルヴァーナ『うん』

レリウス『ここんところかな』コカンサワリ

ニルヴァーナ『ダイレクトだなおい、エロジジイ。少しはコウノトリとかで濁せ』

デデーン ラグナ ハザマ アウトー

ハザマ「今度からあの人への対応変えようかなww」

『EDテーマ 替え歌 ちいさい秋みつけた』

♪ だれかさんが 咎追いの カルル君みつけた

♪ 小さい奴 小さい奴 小さい奴 見つけた

♪ メイク室に置いてある テーブルの上

♪ 素焼きの湯飲みにかくれんぼしてた

♪ 呼んでる姉さん もうすぐ本番です

♪ 小さいシャツ 小さい靴 小さい服 身に着けた

ノエル「カルル君が可愛いって事だけは覚えてます」

マコト「画面いっぱいゴリラジャングルなんか無かった、無かったんだ……」

ツバキ「二人の記憶が書き換えられている……」

ラグナ「最初のDVDはこんなもんか…あつ俺トイレ行ってくるわ」

ハザマ「……待て」

ラグナ「あ？なんだよ、ここでしろってか？」

ハザマ「ちげえよバカ…なあ………なんか匂わねえか？」

ラグナ「何の匂いだよ」

ハザマ「………これは…花火？」

第十八話 ツバキ「あ、咎を追うんじゃないなくてポリスメンに追いかけるべき人だ」

ラグナ「花火い？今冬だぜ？……だが……」クンクン

ラグナ「確かに……この特有の焼けた匂い……火薬っぽいな」

ノエル「ラグナさん！かやくはこんな焦げた匂いしませんよ！もつと食欲をそそるような風味のあるですね……！」

マコト「ノエルくん、多分それ違うぞ」

ツバキ「確かに焦げ臭いですね外で誰かが野焼きでもしてるのかもしれないよ？」

ラグナ「この御時世にかあ？しかも火薬使つて野焼きするチャレンジャーがどこにいるってんだよ？」

ツバキ「そ、それもそうですね……」

ラグナ「よし、ノエル見てこい、GO！」

ノエル「ラグナさん私を体の良い囮かなんかだと思つてませんか？」

ラグナ「？（・・・）」

ノエル「もうっ良いですよ！行けばいいんですよ!!」



ノエル「言つとききますけど、ちよろつと様子見てきて、すぐに帰つてきますからね！」  
他五名「おーん…」

ノエル「ちよつとは心配してくださいよお！悲しくなつてくるじゃないですか！！泣いちゃいますよ、女の子だから!!」

レイチエル「くどい。早く逝つてらっしゃい」

ノエル「はい…」

ガララ ピシヤン

ラグナ「何なんだろうな、この匂い」

ハザマ「まあまあ、焦らずともノエル嬢がすぐに教えてくれるでしょう（丸投げ）」  
マコト「まあノエルんなら大丈夫だよ。前も公園の池の鯉追いかけてまわしてたし」  
ツバキ「何がどう大丈夫なのか全然分からないわ、マコト」

レイチエル「真冬の寒空の下でそんなに元気な体力とプライドを捨てきつた精神の事を言ってるんでしょう、私にはよく分からないけど（丸投げ）」

ノエル『きやあああああ!!?』

他五名「!?!」

ツバキ「今のはノエルの声!?!」

ラグナ「トイレのバケツに足でも突っ込んだかな?」

マコト「ノエルはそんな事じゃこんな声ださないよ!」

ピンポンパンポーン

バング『研修生の皆、聞こえるでござるかー?』

ハザマ「あ、露出狂忍者だ」

マコト「あ、放送室じゃなくて取調室に行くべき人だ」

ツバキ「あ、咎を追うんじゃないやなくてポリスマンに追いかけるべき人だ」

ラグナ「あ、変態だ（直球）」

レイチエル「あ…えと……その………むう（思いつかなかった）」

バング『おお、結構グサグサ来るでござるなあ……』

ラグナ「で、なんだよおっさん。用も無しに放送かけてる訳じゃないんだろ？」

バング『その通り!! まずはこれを見てほしいでござる!!』ポチツ

くモニターく

ノエル『もかもごお…』

マコト「ノエル!?!」

バング『見ての通りノエル殿はこのように拘束されているでござる。そして君たちには彼女の拘束を解く為のカギを探してほしいのだ』

ラグナ「おいおい、もうファミレス研修でもなんでもねえじゃねえか？」

バング『断じて否!!!この行動にはカギを探す為の【観察眼】！早く助け出すために迅速に行動する為の【体力及び敏捷性】！その他諸々のファミリーストランで必要なものを養う事ができるのだ!!』

ラグナ「あつそ…ま、何でも良いけどよ。気は乗らねえがカギ探しn…」

バング『待つでござる!』

ハザマ「まだ何か？」

バング『このカギ搜索、言い換えれば…隠れ鬼ごっこ?である!!』

ツバキ&レイチエル「……………は？」

ラグナ「おいおい、どういう事だよ？」

バング『君たちはカギを探す鬼、それと同様に君たちを探している鬼がいるという事でござる』

ハザマ「…つまりノエル嬢を助け出すカギを探しつつ、私たちを狙う鬼から逃げれば良い、こういう事ですか？」

バング『然り！だが注意点が一つあるのでござる!!』

ラグナ「まだ何かあんのかよ…」

バング『最初は二人の鬼は君たちがカギを見つけれない間の五分毎に一人ずつ増えていくでござる!!』

ツバキ「つまり悠長に構えてる必要は無いわけね」

レイチエル「で？そのかくれオニ？はいつ始まるのかしら？」

バング『もう始まっているでござるよ?』

レイチエル「はあ?」

ラグナ「つ、ウサギ! 後ろお!!」

レイチエル「!」

つづく